

一年籠城の策を取りしにあらざやと、古道具屋より得たるところ四圓三十幾錢、古本屋より得たるところ十圓七十幾錢、此うち九圓を三人に分ち、餘れる六圓を携へて道頓堀に一年ぶりの牛飲馬食を恣にせし後、夜の十時ごろ歸り來れば、固より覺悟の一物もなき空屋なり、

たゞ残せる一個の豆ランプを點じ、寝るに夜具なき一月二十四日の寒夜を語り明せしが、談笑の聲も次第に衰へて、霜白き曉に達せし頃、一語一句に別離の情を含み、竟に語るものなし、

二十五日の朝、午前六時ごろ、いざと身を起して墓石の間より振り返れば、一年間の雨露を凌ぎ一年間の書を読み一年間の夢を結びしところ、我これを指さしていふ、もはや再び人の住むべき筈なし、あのまゝの立腐れに終るべきか取潰されて新たなる墓地となるべきか、いづれにせよ他日また來

りて見るべからずと、感慨無量、上田の如きは既に眼中に涙あり、源光寺の門を出づるや否、互に手を握りて相別れしが、黒田は東に上田は西に谷口は北に我は南に去れり、一年相擁して書を読み、一旦相別れて四方に散ず、寧ろ男子の快といはゞ快なれど、自然の人情、また一種の堪へ難き悲慘といふべし、

三人おの／＼身に纏へる綿衣の外、たゞ僅に心細き三圓あるのみ、その三圓を以て前途遼遠の運命に向ふ、いかに其三圓を用ひしか、いかに其三圓を費せしか、

まづ黒田は其日の午後、郷里へ歸りて別に八圓を工夫せし後、直ちに東海道を歩みて東上し、谷口は大阪に止りて思案橋通りの八百屋に二階借の



自炊生活を営み、上田は三日間に三圓を飲み盡して、堺の親戚へ轉げ込めり、

されど以上三人いづれも徒らに東海道を歩まず徒らに八百屋の二階借せず徒らに親類の厄介物とならず、おの／＼個々の分別あり、おの／＼個々の主義あり、加之も當然に来るべき艱難と戦ひ辛苦を凌いで、三年の後を見れば、いまだ初志の十分一に達せざるも、その境遇は悉く一變して、もはや衣食住を生活問題に數へざるものとなれり、

## 明治二十一年

明治二十一年は我こゝに二十四歳、

源光寺の一年間、月に一度は必ず歸りて母に見えしが、初めは官途に念を断ちし我を怒り中ごろは東西の浮浪に我を疑ひし母も、今は漸く我志を知り給ひしのみか、また前途の事に就いても、たゞ汝の思ふまゝにせよといはれしは、我に於て前途ますます重きを加ふ、

三百五十圓の内、二百圓を乞ひ、二月十二日、郷里を發し、竊に期するところありて廣島に向ふ、

當時、廣島の吳を海軍鎮守府の要地に選定されしが、この吳といへるところは由來その名も人に知られざる寒村僻地にして、俄に山を開き巖を碎き岸を削るの大工事を起し、日夜幾萬の出入、海に陸に殆ど人を以て埋め、四方より争ひ來りし商人は山間に小屋掛の軒を並べ、巖窟の陰また紅燈緑酒の絃歌を生ずるに至る、



一年讀書の曉、他を顧みずして矢を射るが如く、我この吳に投せしは、土方の親分たらむとせしにあらざ、いはゆる工事の請負師たらむとせしにあらざ、小屋掛の商人たらむとせしにあらざ、また固より一寒村の一大變化を見物せむがためにあらざして、別に思ふところありしなり、海軍といへる二字、鎮守府といへる三字、これに對して二十四歳を迎へし一書生は何の因縁なく何の關係なきも、曾て我一身を置きし境遇上より他人の窺ひ得ざる出入の便利あり知人あり、加之も新たに設置さるゝといふ時機は、新たに腕を扼し新たに何物をか得むとせし我をして袖手傍觀に堪へざらしむ、

されど實際の結果は豫期に反せり、今日これを正直に白状すれば、委しく語るべき真面目の業にあらざ、我また一種の火事場盜賊を働かむとせしものにして、その豫期に反せしは寧ろ當然の理なり、數十日の後、吳を去り

し時、二百圓の金が四倍強となりしのみ、沖の鯨を得むとして磯邊の鰯一疋を得たるが如し、

もし嚴格なる意味より論ずれば、一書生の身を以て日夜幾萬の喧騒せる労働者中に投じ、わづか數十日間の懐手に二百圓を四倍強とせしは、殆ど案外の好結果にして、その二百圓を奪はれ袋叩きに逢うて遁げ出さざりしを不思議の僥倖とすべきに、身の程を知らざりし當時の我、實は大に滿腹の不平を抱いて去れり、

面白からざる吳を去りて、直ちに馬關へ押し渡り、その四倍強を半月間に吹き飛ばせし我愚劣は、あまりの愚劣に過ぎて、到底これを筆にする能はず、たゞ再び爲すべからずと心に誓ひし大阪の奇道を馬關に繰り返して首尾よく遣り損ねたる一文なしの恥曝しを明記するのみ、

既に一文なしとなれる我、馬關の恥曝しを以て足れりとせず、さらに餘儀



なく恥の上塗を重ねて、全敗の身を伊豫の三津が濱に轉じ、中島より石丸義書を招き二十圓を借りて大阪に引返せり、たま〜石丸義書は、三津が濱と松山間の鐵道布設に關して一の事業を起さむとし、頻りに我を止めて參謀たらむ事を乞ひしが、その設備と計畫とを具さに聞いて、到底その事の成らざるを諫め、今にして已むの利あるを説きしに、我言を用ひず、竟に鐵道は出來しも、竟に石丸の身代は潰れた

り、人のために先見の明ありし我、自己がために脚下の利害も悟らず、一敗地に塗れて大阪に遁げ歸りしが、竊に期するところありと稱して郷里を去りしもの、今や一言一句もなく馬鹿の骨頂を以て母に見え難く、其ま、後悔慚愧の身を乾長次郎の許に潛む、當時この乾は例の源光寺を去ること遠からざる梅屋敷の傍ら松井某の一室を借りて自炊せり、

乾の土鍋飯を食ひ、乾の小遣錢を割き、をり〜乾の衣服を著倒して、六疊の一室に膝を交へ枕を並べしが、乾また一個の洒落者なり、その寢に就くや、必ず我に戯れて曰く、奥やモウ寢ようかと、蓋し我の不意に轉げ込みし時、義理のある噂アでも持ツた覺悟で居れと言ひしがためにして、この乾は後に沖繩縣の參事官となり、今は神戸に住めり、

乾と同居せし時、既に我みづから我を責めて、深く心に恥づるところありしが、さらに我をして慚愧ます〜慚愧を加へ後悔ます〜後悔を加へしめしは、一日、横井也有の『鶉衣』を繕きしに、蟹の目の上のみ付きて猿の手の尻に及ばずといへる一文あり、いかにも我は蟹の如く目ばかり高く上に飛び出でて自己の力を圖らざるのみか、また社會の大道を強ひて横



這ひに渡らむとする點あり、いかにも我は猿の如く自己に尻始末の届かぬところありて今日までの事々物々を過てり、たゞ一片の諧謔を弄せし俳文なれど、當時の我ためには冷笑罵倒の極、面皮を剝がるゝが如くに感じて再び讀むの勇氣なからしめたり、

また數日の後、松井某より借れる日蓮上人の遺文を讀みしに、刑部左衛門の女房に孝をすゝめし返書の一節中、

飛ぶ鳥の子を養ひ地を走る獸の子に責められ候事、目もあてられず魂も消えぬべく覺え候、それにつきて母の御恩忘れ難し、胎内に九月の間の苦しみ腹は鼓を張れるが如く頸は針を下けたるが如し、氣は出づるより外に入る事なく色は枯れたる草の如し、臥せば腹も裂けぬべし、坐すれば五體安からず、かくの如くして産も既に近づき腰は破れて切れぬべく眼は脱けて天に昇るかと思ゆ、かゝる敵を産み落しなば大地

にも踏み付け腹をも裂きて捨つべきぞかし、さはなくして我苦を忍び急ぎ抱きあげて血を舐り不淨をすゝぎて、胸に掻い付け抱きかへて慇懃に養ふ(中)而るを親は十人の子をば養へども子は一人の母を養ふことなし、あたゝかなる夫を懷きて臥せども凍えたる母の足をあたゝむる女房はなし(中)日蓮が母存生して在せしに仰せ候ひし事をも餘りに背さまゐらせて候ひしかば、今おくれまゐらせて候が強ちに悔しく覺え候云々、

我この一章を讀みし時、おもはず慄然として畏縮せり、

我は幼少にして小學校の生徒たりし頃より、既に漢學塾に通うて漢籍に養成され、いはゆる孝は萬善の基といへる第一義に於て、絶えず其孝を説くの教に接せしが、いまだ斯の如く平易なる日常の俗文字を以て、斯の如く深酷に人を訓戒せしものなく、始めて活ける文章の妙味を知りしのみなら



ず、また始めて天下に生命なき章句の死屍累々たるを悟れり、  
 加之も母に見ゆべき顔色なかりし當時の我としては、鐵槌を以て頭腦を粉  
 砕せらるゝが如く、拇指を以て眼球を抉らるゝが如く、我に十人の兄弟な  
 けれど、二十四歳の今日いまだ一人の母をして喜ばしむる能はず、幸ひ我  
 に凍えし母の足を暖めざる妻なけれど、顧みれば鳴東の八個月、我に暖か  
 なる一婦ありて母を問はざりし事あり、

後年、我の『日蓮』を著すや、「故郷の空」と題せる一節に筆を執りて曰く、

いつしか春は去り夏も過ぎて秋は來りぬ、葛の裏葉を吹く庭の夕風、  
 草の庵に缺け行く窓の月影、露は滋く夜は更けて、鎌倉山を啼き渡る  
 雁が音を聴くに付け、鐵の如く焰の如き日蓮、また心弱く人間の子な  
 り、めかり鹽たく磯の苫屋に老いたる母一人、いかに在すらむと思へ  
 ば、人しれぬ涙に故郷の空を懐し、

靈は正像二千年の雲を拂うて東海の一角に宿りしが、身は五濁の浪う  
 ち寄する安房の國の小港に生れて、十二の歳に郡内の清澄山に上り、  
 十六の歳に出離の頭を圓め、十八より三十二の曉まで八宗十宗の底  
 を叩いて旅の空を駆け廻りしが、建長五年四月二十八日、佛法たゞ一  
 味と見出しけるこそ時の不祥なれ、由來さらに法華經の行者として權  
 門の邪教に打たれ謗法の外道に焼かれ、或は呪はれ、或は流され、敵  
 は大地微塵の數より多く味方は雨夜の星に等しく、古今一人の惡まれ  
 者となり天下萬民の捨てられ者となりて、法のため人のため國のため  
 とはいへ、この末いかに成り行くやら明日をも知れぬ身と思へば、先立  
 ち給ひし父の墓、さぞや荒れ果てなむ、残り給へる母の朝夕、さぞや  
 淋しく在すらむ、棄恩入無爲、眞實報恩者、されど我に父ありて生れ  
 母ありて生れぬ、



幸ひ今は身に迫る禍害もなし、せめて事なきうちに父の墓を拂ひ母の心を慰め、別れて後の師の房にも見え奉らむと、松葉が谷の庵を日昭に守らせ、日朗日澄の二人を連れて、折しも十月の末旬、ちりくる木葉を袖にうけながら師弟三人鎌倉を立出でぬ、

日蓮、四十三歳、うまれし小港の浦、なつかしき東條の山、沖の欸乃、磯の松風、網干の影に小兒の戯るゝ状態、我も昔の夢と見れば、幼心に覚えし門邊の柳も年経て太くなりぬ、

日本第一法華經の行者日蓮とも得いはず、はや暫し忘るゝ凡夫の涙を含みながら、蓮長こゝに歸れりとの聲は、かほどの子を持ちしとも知らず霜を戴く母人、老の耳を傾けて幾度か疑はれしぞ、

その身延に入りし後の日蓮を記して曰く、

日蓮、逆化の奮鬪を閉ぢ、折伏の毒鼓を收め、たちわたる身の浮雲も

はれぬべし妙の御法の鷲の山風と詠じて甲州の身延山へ入りし後、なほ故郷の昔を思ひ父母の恩を憶うて念々さらに堪へず、晴れ渡る空に霞のなき時は六十の老の身に巖角を攀ぢ木の根を傳うて我住む菴より五十餘町の高峰に上り、遙に伊豆と相摸の雲か山か水天一髪の間戀しく懐しき房州の岬を望み、世を捨てし衣の袖を絞りながら父と母との冥福を祈りぬ、風雨星霜六百年の今日、依然たる身延の山の奥の院、この古蹟を思親閣と稱し育恩堂といふ、

我は日蓮宗の門徒にあらずして、日蓮の遺文に深く心を寄せ、また従うて多く読み、後年その日蓮を著すに至りし動機は、わづかに三里を隔て、母に見え難き不孝の當時、宛ら拷問に逢へるが如く、その孝をすゝめし一文に責め付けられしがためなり、

俳人横井也有一戯文に我行爲を罵倒され、日蓮上人の消息文に我不孝を



詰責されし當時、また別に騷壇の文才として我を辱しめしものは、わづか十七歳にして大阪繁昌詩を著せる田中樂美なり、樂美は右馬三郎と稱し、他より見れば未だ黄口の乳臭兒を以て耳目の觸るゝところ自由自在に一百三十餘首の都詩を吐けり、その引に曰く、池五山翁、嘗曰、人有都鄙之分、詩亦有都鄙之分、此詢大家之論也、我既爲都人一矣、雖年少、稍登騷壇、呵陰毫、何可無都詩、(中)然我才酷薄劣、故專學陸放翁詩論、不鍛鍊、又不劉削陸務觀曰、鍛鍊之久、乃失後世讀我詩者、見無千鍾百鍊之奇句警語、必千鍾百鍊、而後能成笑、黃口兒帶乳臭、抑元史楊載曰、詩當取材於漢魏、及王阮亭所言、唐詩主情、多蘊籍、宋詩不及、此非所庶幾也、我竊嘗有取姜水心家言、水心云、文不關世道、雖工無益、詩亦然、その道頓堀の劇場に至るべき戎橋を記して、

経兒橋架道頓溝、北與心齋橋遙相通、凡觀戲場之客、多渡此橋、橋上

南望、則所謂梵天挿欄上、曉皆起鼓聲、是爲始技之報、

殘月照欄光似霜、江南喚客鼓聲忙、  
橋頭厭見惡風俗、母拉女兒奔戲場、  
その俳優のため身を過る婦女の多きを記して曰く、市中女子、趨戲場、慕俳優、竊有通情投書者、有遺金贈帛者、覩面目、不愧醜聲、

梨園弟子美名隆、妙技分明姦又忠、  
深惜千金豪富女、沒身尤海滯波中、

眞言阪の西、高津新地に所謂百軒長屋の貧民窟あり、その状態を記して曰く、此巷窳漢雜居、有買爛紙者、有鋼敗鍋者、有修煙管者、有補履齒者、日出市上、呼己業、餬吾口、皆窮人無所歸者、獨至賭房主、蓬髮箕踞、牛飲馬食、典衣賣財、益窮乃濫爲白日掠奪之亂、  
都下呼白日掠奪者曰晝奪、夜中立水濱曳行客袂街嫗者稱總嫁江戸俗呼稱夜鷹



數日難<sup>レ</sup>揚<sup>レ</sup>竈<sup>下</sup>煙、赤繩<sup>枉</sup>結<sup>レ</sup>惡<sup>レ</sup>因<sup>レ</sup>緣、  
一生<sup>生</sup>計<sup>眞</sup>堪<sup>レ</sup>憫、婦<sup>是</sup>夜<sup>鷹</sup>夫<sup>晝</sup>爲、

順慶町の深夜、路上に賣<sup>ト</sup>者と乞<sup>食</sup>の多<sup>ク</sup>を見るや、坐<sup>レ</sup>地<sup>乞</sup>錢<sup>誰</sup>豫<sup>讓</sup>、  
點<sup>レ</sup>燈<sup>賣</sup>ト幾<sup>君</sup>平、新町の青樓<sup>を</sup>仰<sup>ぎ</sup>見て、蕩<sup>郎</sup>漫<sup>散</sup>千<sup>金</sup>去、不<sup>レ</sup>憫<sup>二</sup>簀  
人<sup>憫</sup>麗<sup>人</sup>、七月の孟蘭盆<sup>に</sup>淀川<sup>の</sup>堤上<sup>より</sup>京都<sup>の</sup>如意<sup>が</sup>嶽<sup>を</sup>望<sup>み</sup>、その  
髻<sup>髻</sup>たる一<sup>星</sup>火<sup>の</sup>如<sup>き</sup>を見るや、遙<sup>知</sup>直<sup>北</sup>皇<sup>城</sup>近、大<sup>字</sup>山<sup>頭</sup>洩<sup>二</sup>火<sup>光</sup>、また  
市中<sup>の</sup>寒<sup>風</sup>に技<sup>を</sup>演<sup>せ</sup>し越<sup>後</sup>の角<sup>兵</sup>衛<sup>獅</sup>子<sup>を</sup>見るや、注<sup>目</sup>不<sup>レ</sup>爲<sup>二</sup>容<sup>易</sup>戲、  
可<sup>レ</sup>知<sup>レ</sup>巖<sup>下</sup>放<sup>レ</sup>兒<sup>心</sup>、

以上は只これ一百三十餘首中の二三を擧ぐるのみ、凡そ耳目の觸るゝところ  
感想の浮ぶところ、悉く詩となり文となりて、加之も所謂<sup>る</sup>詩人の詩に  
あらず文人の文にあらず、別に一家<sup>を</sup>成<sup>せ</sup>り、この田中樂美に對して、そ  
も〜我の十七歳は果して奈何、

當時の我には、たとひ鋏<sup>を</sup>執<sup>ツ</sup>て農夫たるも文<sup>を</sup>以<sup>て</sup>世<sup>に</sup>立<sup>つ</sup>の念<sup>なく</sup>、  
いはゆる志<sup>は</sup>文字<sup>以外</sup>にありしが、十七歳の田中樂美に對して二十四歳  
の我を顧みれば、期<sup>す</sup>るところ同じからずと雖も、殆ど顔色<sup>なし</sup>、  
源光寺の一個年間、日夜奮勵<sup>して</sup>書<sup>を</sup>讀<sup>み</sup>、加<sup>之</sup>も竊<sup>に</sup>自<sup>ら</sup>活<sup>眼</sup>活<sup>書</sup>を  
以<sup>て</sup>誇<sup>り</sup>しが、その活眼活書に誇<sup>り</sup>し結果<sup>は</sup>無<sup>一</sup>文<sup>の</sup>丸<sup>裸</sup>となり、今は却<sup>か</sup>  
ツて半日を費<sup>さ</sup>ざる也有<sup>の</sup>一句と日蓮<sup>の</sup>一文と樂美<sup>の</sup>一章とに得<sup>た</sup>るとこ  
ろ多<sup>し</sup>、



### 失敗また失敗

かぎりある乾の土鍋飯を長く平氣に食ふべからず、覺束なき乾の小遣錢を長く暢氣に割くべからず、たとひ山海の珍味ありとも、我は去らざるべからず、

十一月六日の朝、乾に告げて曰く、この奥はモウ今夜から寝ないぞと、その行くところを問へども答へず、聲なく笑うて、たゞ一策ありといふ、當時の我、事々物々の結果は常に失敗に終りしが、終るまでの間、また如何なる難關も案外の手輕に脱せしがため、もし窮すれば必ず策を弄するの癖あり、實は一策ある毎に一敗を加へ來りしが、なほ改めず、ますます窮して益々通ずるが如くに誇り、この時また一策ありといふ、

後年、我に『人間學』の著あり、その一項に、策略なるものを論じて曰く、

策略とは人間の正道に對する奇道なり、社會の公道に對する間道なり、うき世の大道に於ける裏道なり、奇才奇策の語は固より君子方正の意味に反せり、

古來この策略なるもの、多くは戰鬪上に用ひらる、戰は餘儀なく取れる奇道なり、これを施すに奇策なかるべからず、

いかなる場合にも斷じて用なしとは、古今ともに一貫せる修身教育の訓戒なり、世を擧げて方正の君子ならざる以上、その波瀾曲折に應ずべきもの多少の策略なかるべからずとは、常に人生の表裏を往來せるもの、實驗談なり、策略の用と不用、其いづれを取るべきか、神算鬼謀、奇策縦横、變化巧妙、出沒自在といへば、いかにも複雑混



亂せる人生の道路を前後左右に縫うて躓かざるが如く、辻に立ッて迷へる迂愚拙劣の輩は到底その足跡を窺ひ知るべからざる痛快事なれど、奈何せむ、事實の示すところは遅々たりとも天下の公道を歩むものに遺算尠く、最後の結果は所謂策士なるもの、奇才に寧ろ遺算多し、

戦術上に謀の多きものは、缺くべからざる必要の好參謀なれど、人事上に謀を好むものは、友とすべからざる無用の惡辣家たるに似たり、

策の多きは策なきに如かず、策の最も巧なるものは策を施さず、策それ竟に用ふるところなしとは、たゞ禪味的の達觀上より來りし警句にあらず、實際に於ても殆ど不用なり、ましてや科學的に發達し秩序的に進歩し常識的に判斷せらるゝ今日の

社會、いはゆる策士の策を施すべき餘地は次第に狹められて、うかすれば策略の一轉それ直に犯罪となるの恐あり、凡人の歩武を揃へて進行すべき世の中に凡人以上の獨斷行爲は寧ろ破壊者たるに等しく策士の目より見たる馬鹿正直の世の中に先生たゞ獨り秀で、奇策縱横たるは頗る危し、火の元の御用心なかるべからず、

もし今日なほ策略の必要ありとすれば、あくまで慎重なる思慮の結果、その策略以外に道なくして、勢ひ已むを得ざる場合に處すべき只これ一時の都合上のみ、加之も自己の都合上を以て他に害を及ぼさず、また其目的に對しても善意の行爲たらざるべからず、實は策略にあらず難關を打破すべき智慮の轉換方法なり、始めより策を設けて豫期せる手段に策を施すが如きは、寧ろ今日の社會を解せざる時代おくれの狂言師にして、たま〜首尾よく演じ得らるゝ事あるも、竟には其策を



以て人を倒さず、御本人みづから自己を倒すに至るべし、たとひ世に傑出せる多謀の策士も、その最後を打算すれば、末路に於て多くは皆これ失敗の歴史を餘せるのみ、まして世間に片々たる無謀無数の小策士が何の得るところあるべき、いたづらに切れもせぬ小刀細工を振り廻す暇あらば、これを正直に磨ぎ直して楊枝でも削るの神妙なるに如かず、

策士は曰く、元來この策略なるもの、事に當りて力の足らざるがため正々堂々の道を回避せるにあらず、寧ろ餘りある智を以て事の進行を圓滑ならしめ迅速ならしめ、いはゆる難事を簡易ならしむるものこれ策略なりと、されど力の足らざるにあらずして智に餘あるもの、そも何を苦しんで殊更に正々堂々の道を踏まざる、回避せるにあらずといへど事實は回避せるなり、もし極言すれば卑怯未練に通げながらの太

刀打なり、加之も難事を簡易ならしむべき策略は、事實の結果に於て簡易を難事ならしむること多し、誠意誠實を以て解決すべき問題も其間に策略あるがため却つて紛擾を來し澁滯を醸すこと多し、つまり策を施さざれば事を爲し得ざるもの實は自己の力にも智にも叶はざるがためなり、いかに好意的の讚辭を呈するも、相當の勞を費さずして望外の功を得むとする横著者たるは免れず、たとひ千變萬化の奇策縱横も、急がば廻れの俗語たゞ一句に及ばざるべし、戀に業の多き女は其戀を成就する能はず、事に策の多き男は其事を成就する能はず、今日の所謂策士なるもの、その多くは徒らに小説的の戰國策を夢みて現實界の人事上に用ひむとす、既に時勢を間違へ舞臺を取違へて策の得たるものにあらず、彼等の常に冷笑眼を以て馬鹿正直とするもの、寧ろ却つて彼等に對す



る無爲無言の大策士といふべし、

されど我は其後に於ける二十餘年の經驗を積み來りし今日の我にあらず、この無爲無言の大策士たるを得ざりし當時の我にして、窮すれば常に策を好み策を用ひ、以て自ら策ありとせる我なり、

乾の土鍋飯は六日の朝を食ひ終めとして去り、大阪南區の笠屋町に鳥井駒吉を訪ふ、

我郷人中の實業家として、語るに足るべきものを求むれば、まづ第一に鳥井駒吉を擧ぐべし、鳥井は酒造家にして、深く文字なしと雖も頗る進取の氣に富み、加之も時勢を看るの明あり、今日は普通一般の觀あれど、日本酒の瓶詰なるものは、そも〜春駒の銘を以て彼が率先せしところ、鐵道は官設以外いまだ民間に著手せざりし頃、大阪の南端と堺の北端とに豆を以て一日幾人の往來出入を一箇月の平均に計り、これを交通機關の三倍とし

て後、始めて私立の阪界鐵道會社を起し其社長となり、また別に旭ビール會社の社長となり、さらに其他の諸會社諸銀行の重役を兼ね、當時の關西に經濟界の重鎮とせられし松本重太郎と深く相結託せしが、松本の失敗と共に晩年を盛ならしむる能はず、京都木屋町の津四樓に病を養へる時、我これを訪うて頻りに世界一周を勧め彼また奮つて海上生活を取らむとせしが、その衰弱は既に事實を許さずして、半歳の後、竟に死せり、我は常に惜しむ、もし彼をして更に數年の生命あらしめば、捲土重來、必ず掉尾の勢ひを示すべしと、

この鳥井駒吉はその頃日夜の經濟界に馳驅せしため、殆ど郷里に歸らずして笠屋町にあり、六日の朝、我これを訪へば、將に出でむとする時、俵を捨て、内に入り、膝を組んで語る、

蓋し鳥井と我とは親しき友にあらず、年齢また遙に相隔たりて、加之も彼は



既に實業家の嘖々たるもの、我いまだ一書生の一事を爲し得ざるもの、されど彼は曾て税所氏の許にありし時の我を能く知れるのみならず、一時は全國に堺の綴通王と稱せられ盛に海外へ輸出せし藤本某の我を批評して、危険分子を含める怪物兒とせるに對し、大に争ひ寧ろ我を成功分子の多き快男兒とし、快と怪とを鬪はせし一場の議論を座にありし同じ酒造家の大澤徳平より傳聞せる我、實は當時この鳥井を知己の一人に數へたり、親しからざれど、私の訪ひしを深く喜び、加之も簡潔に來意を聞きたしといふ、我また單刀直入に膝を進めて曰く、もし我をして一商人たらしめば幾何の價值ありや、また如何なるところに最も用ひ得べきやと、あまりの唐突なる問題に流石の彼も聊か返答に苦しみしが、我さらに由來の失敗を露骨に白状せし後、政治上より商業上より今日の朝鮮は必ず他日の我國に見通すべからざる有利の地なるを説き、まづ我を視察といへる名目の下

に尠くも半年間、いづれか貴下の關係せる會社より派遣さるゝの便利なきやと問ひしに、暫く首を傾けしが、手を振りて曰く、關係の諸會社は寧ろ面倒なり、如かず我一個のポケットより君のため半歳の費を辨せむ、たとひ會社の派遣員とするも君の志は必ず他にあるべし、我は半歳の後に君の朝鮮論を聞けば満足すべしと、當時我郷人中この一言を發し得るもの鳥井たゞ一人のみ、其ころ大阪一般の人心に於ける朝鮮といへるものは、或一部の商人に多少の取引ありし以外、明治十三年、始めて京城に我公使を駐割せしめし事と、十五年に朝鮮兵亂の我公使館を襲ひし事と、近くは大井憲太郎以下の朝鮮疑獄に依りて、漸く朝鮮に對する念を喚起せるのみ、この際の一書生に向ひ、半歳の費を以て、君の朝鮮論を聞けば廉價なりといへる彼は、たとひ我朝鮮論に何等の價值なきにせよ、たしかに金の費途を知れるもの



なり、

五百圓の内、源光寺の一年間に百五十圓を乞ひ、三百五十圓の内、廣島に向ひし時、また二百圓を乞ひ、なほ百五十圓を母の手に餘せど、母の手にありしがため残りし百五十圓にして、もし我手にあれば固より一擲千金の奇道に得たるもの、もはや既に鏹一文の影もなかるべし、母にして始めて五百圓を三度に分てり、母ならずして當時その金を餘すべき我ならむや、

されど三度目の百五十圓は我これを乞ふの辭なく、また乞ふに忍びず、いよく母に見ゆるの勇氣なし、幸ひ郷黨に信せらるゝ鳥井を證人として彼地より一書の罪を謝せむと、其まゝ直に發せしが、辭なく忍びず勇氣なし

とは他人に對せるが如き自己の強情我慢にして、苟くも海を渡り行くもの、我を産み給ひし一人の母に告げざりしは實に不孝の極といふべく、果して前途の運命は我を遮りて、觀面その罰は當れり、

日蓮の遺文に不孝を責め付けられし我、心に恐れて加之も猶また不孝を重ね、也有の一句に罵倒せられし我、身に恥ぢて加之も猶また蟹の横這ひと猿の手の尻に廻らざるが如き朝鮮行を企てたり、

されど我みづから我を辯護するにあらず、當時この朝鮮行は寧ろ母に對し我に願みて最も策の得たるものとし最も効果のあるべきものと信せり、



生死の境

新調の時日を待つよりも幸ひ他人の手附流れとなりし出来合の背廣服と外套を購ひ、銀側時計としては第一の高價なるを求め、當時いまだ必要のピストル一挺、手提カバン一個、毛布一枚、旅行に關する一切の用意を濟ませ、その間は難波の宿屋に身を潛め、十一月十六日、神戸に至る、長崎に書面を以て解決し難き鳥井の委託事件ありしたため、途中に數日滞在の必要を生じ、十七日の午後三時出帆、まづ長崎に向ふ、甲板より和田の岬を後に振り返りし時は、夕陽赤く西に春いて、海波また近來になき平穩なりしが、夜に入りて播磨灘を過ぎし頃、俄の暴風雨に夢を破られ、刻一刻に加へ来る怒濤激浪のため、當時の船體としては殆

ど堪へ難き危険に陥り、船客いづれも手鞠の如く轉輾せしのみならず、船底に一種異様の大音響を發するや否、忽ち進行は止りて機關の損せし叫び聲あり、船體ますく狂風狂雨に弄ばれ、船員ますく周章狼狽を極め、闇夜咆吼の潮流は將に船を呑んで海底に没せむとするの恐あり、一時に起る満船の號泣喧騒、鼎の沸くが如き中より最も物凄く聞えしは帛を裂くが如き婦人の悲鳴にして、顔色を失ひし船員の口より、大丈夫とは思ひますが皆さん萬一の御用意を願ひますといはれし時は、正に死の宣告なり、我は中等室にありて、自己の身體を柱に縛り付け、わづかに苦中の顛倒を防ぎしが、この一聲を聞くや、直に縛を解いて外套を脱ぎ上衣を脱ぎチヨッキを外し、ズボンを外しシャツと股引の上下となりしは、幼少より茅渟の浦邊に育ちて游泳は人に劣らざりしを萬死中の一活と頼みしのみ、當時その實際を告白すれば、危険の念も恐怖の念も既に去れり、否、去れ



るにあらずして失へり、危険を感じ恐怖を抱くは其以前にして、事ここに至る、人間は正に一個の無念無想なり、敢て殊更に禪味の無念無想を學ぶに及ばず、全くの死に瀕せる一刹那は、たゞ惘然たるを以て事實とす、これを平生の常識に判断すれば、殆ど喪神せるものといふべく、もし死を見ること歸るが如く或は神色自若たるものありとせば、死に對する時その死に代へ難き何等かの大きな誇りあるがためにして、不意に起れる無用の死に臨みては、凡そ何人と雖も喪神の惘然たらざるを得ざるべし、さらに無遠慮なる告白せしめよ、我は常に膽略の人に過ぎたるを以て任じ、また如何なる變に臨みても爲すべき事を爲すべしといふ自信を抱けり、されど萬死中に一活の用意せしは、危険と恐怖の念ありし間にして、その以後に於ける我は何等の用意もなく何等の覺悟もなく、たゞ紛亂混雜中に人のため押し倒されず人のため踏み倒されざりし勇力ありしのみ、また徒ら

に泣き喚かざりしのみ、その死を通るゝに遺憾なき最善の方法を取るべき智力は殆ど失へり、これを以て我膽略を疑ふものあらば甘んじて疑はれ、その不用意と不覺悟とを笑ふものあらば甘んじて笑はるべし、奈何せむ當時の實際は斯の如きのみ、

明治三十一年の一月、三度目の臺灣に兒玉總督を訪ひし時、たま／＼臺南の巡視中にして、我ために後藤民政長官これを打電するや、南向せよとの報あり、總督は南より北に向ひ我は北より南に向ひ、途中の會合を期して臺北を發し、苗栗に一泊せしが、臺中に逢ふの期を計りて道を急ぎしがため、強ひて深夜その苗栗を立ちしに、凡そ十七八町を行きし時、我一泊せし宿に土匪襲來の變あり、この時の土匪は最も猛烈の焼打と共に殺戮を極めしがため、もし我その難に奮闘するも必ず死すべく、夜いまだ明けざる苗栗の山道より炎々たる火焰を振り返りし時、始めて危険を感じ恐怖の



念を抱けり、蓋し危険と恐怖とは寧ろ死の一刹那にあらずして死を免るべき前後にありといふべし、

宗教家、軍人、その他の信念に斃れ主義に斃るゝもの、死に臨みて莞爾たるは、その死に價あるがためにして、無用の犬死に遺憾なきものあるべからず、大悟徹底せし一休禪師の如きも、その死に際しては、あゝ死にたくない死にたくないと呼びしにあらずや、天真流露、自他を欺かざる點に最も貴さを覺ゆ、

されど我の播磨灘に死せむとせし時は、あゝ死にたくないと呼ぶ餘地も觀念もなくして、たゞ惘然たる身を運命に任せしといふよりは運命に弄せられしのみ、

幸ひにして天明の頃、暴風雨は次第に衰へ、怒濤激浪また従うて沈み、始めて蘇生の觀ありし時、船中また人情の見苦しき弱點を遺憾なく現せり、

一時は既に死人の如くなりしもの、やれ安心と思ふや否、俄に財布がないと叫び出し、急に氣が付いて羽織がない帽子がない傘がない、中には下駄がないとて騒ぐ奴あり、

我は叫ばざれど、また紙入がないの一人にして、チヨツキの内隠しに深く入れ置きし朝鮮半歳の金なし、金なきにあらず脱ぎ捨てしチヨツキなし、生命の外に無慾となりし混亂中、我チヨツキを盗むものゝあるべき筈なく、縦横無盡に狼狽へて狂奔せしもの足に搦みて引き摺り行きしかと、船員に搜索を頼めば、大喝して曰く、チヨツキぐらゐ何ですと、いかにも昨夜の難を思へば、チヨツキぐらゐの騒ぎにあらず、されど我には此チヨツキのため騒ぎの静まりし後の大變なり、

事務長に委細を告げ、ボーイに残れる墓口の銀貨を與へ、殆ど隈なく船中を搜索せしが、他人の帽子は出で傘は出で下駄も出で、あゝ慌て、取



違へし物品も互の交換を濟ませしに、我チヨッキは出でず、上等客の二人に手提カバンと外套を失ひしもの、また竟に出でず、されど盗まれしにあらずと断定すれば、上を下への混乱中、何者かのため夢が夢中の手足に引ツ掛けられ、一たび船室より甲板に持ち行かれし後、風波に取られしものとして、最後の一決、いよく無いに極まれり、殆ど死すべき生命を死せざりしは、不幸中の幸なれど、生きて後の我に於ける此チヨッキ一枚の紛失は、實に幸中の不幸にして、餘儀なき運命とは雖も、また茲に失敗の數を加ふ、人と共に船は沈没を免れしが、あらゆる甲板上の器具を失ひしのみならず、第一に機關を損せしがため、片跛の如くなりて神戸に引き返し、船客には其船賃を他の汽船に代用せしむ、されど我は再び西に向はずして東に向へり、

## 四回の東上

播磨灘のため航海の危険を恐れしにあらず、直に已むべき薄弱の意志を以て朝鮮へ渡らむとせしにあらず、只チヨッキ一枚を失ひし我不運は、事實に於て西に向ふ能はざらしめたり、その事實を鳥井に語りて再舉を圖らむとせしが、自然の運命にせよ、人力以外の結果にせよ、重ねて再び他人の好意を強ふべからず、委細の一書を大阪の笠屋町に送り、たゞ長崎の委託に負さしを謝せしのみ、當時もし我をして無事に朝鮮へ達せしむれば、果して我に如何なる前途あ



りしや、

現在の墓口に残りしは四圓餘、時計を賣りて八圓五十錢、チヨツキなき上著の胸を合せ、幸ひ失はざりし外套の襟を深く立て、十一月二十日、其ま直に神戸より汽船に乘じ横濱に向ふ、

これを四回目の東上とす、

前後二度の身を置きし本郷弓町の下宿屋に投じて、明治二十一年の暮を送り、二十二年の一月を迎へしが、我こゝに二十五歳、

二十五歳の曉を迎へし我、まづ第一に何を爲さざるべからざるか、實に恥づべし、まづ第一に工夫せざるべからざるものは、下宿屋の支拂なり、

三年前、この下宿屋に入りし時も、當面脚下の急務は下宿料にして、三年以後の今日また眼前の必要は下宿料なり、その間に多少の爲せしところありしも、その爲せしところは悉く失敗に終りて、たゞ徒らに曲折波瀾を

重ねしのみ、たゞ徒らに苦心慘憺を積みしのみ、他日これを無用ならざる人生行路の足跡とすべき時節ありとも、當時いまだ半文の價値なくして、現在一日の飯代にもなり難し、

農商務省の記録局より再び寫字料を取るが如き姑息に流れず、日給取となりて源光寺の一時を凌ぎしが如き彌縫に落ちず、今更ら首を縮め腰を屈めて舊知の門を潜るが如き卑怯に出でず、また窮餘の一策さらに一敗を加へて後悔を繰り返すが如き愚を演せずして、眼前の下宿料に容易ならざる赤裸々の一身を新たに立てむとすれば、たゞ飯を食ふといふ馬鹿げたる事も實は案外の難事なり、

されど二十五歳を迎へて四回目の今こゝに東上せし我は、過去の經歷を悉



く抹殺し、由來の心に誇れる一切を消滅し、もし取捨すれば多少の残すべき點あるも斷然これを残さず、もし辯護すれば多少の惜しむべき點あるも斷然これを惜しまず、あらゆる總ての我を脱し、あらゆる總ての我を忘れて來れり、これを商人とすれば、たゞ一冊の大切なる出入帳を燒き捨て、來れり、

いかなる人の好意あるも、今日以前の知れる人より一切その好意を受けず、いかなる援助あるも、今日以前の關係より生ずる一切の援助を受けず、いかなる幸福あるも、今日以前の因縁より來れる一切の幸福を受けず、明治二十二年の一月、我こゝに二十五歳の曉を生涯の境と定め、潔く過去を葬り現在を初歩とし將來に新なるの覺悟を以て來れり、從うて亦その接する人も生ずる關係も因縁も一切これ新なるべき決心を以て來れり、この不利益なるが如き覺悟と、この不自由なるが如き決心とは、寧ろ今日

までの我を新ならしむるに最も效能あるのみならず、また却つて他日の我に利益あらしめ自由ならしむべきものと信じて來れり、もし我生涯中に聊か取るべきところありとすれば、只この時に於ける只この一事あるのみ、

たとひ人の捨てたる竹の皮を拾ひ集めても露命は繋ぎ得べき繁華の地に、盲目ならざる兩眼を放ち不具ならざる手足を動かせば、それ以上の飢渴を凌ぐべき道は必ず有るべしと決心せり、もし人間の生涯に浮沈を免るべからざるものとすれば、水に投ずると一般、深く沈みて足の踵の底に著くもの却つて必ず早く浮び、淺く溺れて水中に漂搔くもの寧ろ容易に浮び難し、思ひきつて男らしく飛び込み、沈まば底まで沈まむ、め、しく岸に彷徨うて運命に背骨を突き落され、沈みもせず浮びもせず、あぶく途中に長く苦しむべからずとは、當時に於ける我の



決心なり、もし人を呪ふ悪魔なるものありとすれば、その悪魔の呪へる以上に我より身を捨て、寧ろ一番お氣の毒の感を起さしむべし、幸運の神に暫く縁なき我、不運の神に屈せずして敵するも亦これ一快事なりとは、當時に於ける決心の程度、殆ど昔の獍猛なる悪太郎に返れり、ならば手柄に我を殺して見よとの念、ひらくと起れり、

### 木賃宿

明治二十二年の一月九日、七日正月の雑煮餅を下宿屋の膳に据ゑられしよ

り三日目、主人を呼んで舊臘十一月二十日以來こゝに四十餘日間の下宿料に對し、外套一枚を脱いで曰く、この上に長く迷惑をかけむよりは今のうちに去るべし、十三圓幾何は借用證書として外套を先拂ひの利息に添へむと、主人は曾て前後二度の我に案外の信用を置きしもの、大に同情を寄せて男氣を見せ、なほ一二個月を貸さむと誓ひしが、断じて受けず、強ひて證書を残し去る、その外套を取らざりしは、一月の寒中に頗る我ための恩恵なり、この主人その名を佐藤常吉といふ、他日その證書を三倍に買はむとせしが、私の去りし翌年、他の事に失敗して夜遁げ同然に行くところを知らずといふ、もし今日いづれにかありて此一章を讀まば來訪せよ、證書の有無に關せず、十倍に購ふべし、こゝに附記す、



本郷弓町の下宿屋を去りて、第一まづ我足の向ひしところは何處ぞ、三味線堀の佐竹が原、

當時の佐竹は今日の如き繁昌の地にあらず、繁昌は繁昌なりしが、その繁昌は世間普通の衣食住を得ざるもの夜毎に四方より落ち込み來れる露營的の繁昌にして、いはゆる木賃宿の繁昌なり、これを佐竹ッ原といふ、

原をハラといはずしてバラと呼ぶの語勢、江戸ッ兒辯より來れど、既に一種の人間階級を意味して、多くは労働者中の最も下等なるもの、流れ渡りの土方人足と立ん坊の類を以て満たされ、屑拾ひと羅字の仕替屋は寧ろ眞面目なる營業的に屬せるもの、薄闇さところに亡者の如き顔色憔悴を現はせる八卦よい屋の賣卜者は、この世界に於ける高尚優美なる先生にして、その他は推して知るべし、

いづれも晝は木葉の如く四方に散ずれど、夜に入れば磁石に吸はるゝ如く

四方より集り來りて、濛々たるカンテラの黒き煙に包まれたる下、以上の人間に供給すべき呉服屋は、大道の蓆に襪襦半纏を吊し破れ股引を曝し古足袋を重ね、その食物はパンの附焼おでん燗酒、泥水に似たる駄汁粉、砂塵に塗れし阿部川餅、一膳飯の繩暖簾、いまだ馬肉の盛ならざりし頃にして、二錢五厘の豚鍋は頗る贅澤の上等客と稱すべく、その寢所は一夜三錢の木賃宿、これを人間存在の衣食住とす、

この存在、また無事に繼續するものなく、雨は彼等の最も恐怖せる大敵にして、もし一日の降雨に逢へば一日の食なく、木賃宿に材木を並べたるが如く、無言のまゝ横たはりて少しも動かさず、みだりに動けば腹が減る恐ありといふ、されど晴天となれば、この材木、むくゝと一時に跳ね起きて四方へ飛び散り、その得たるところは、其夜また直に佐竹が原の繁昌を來せり、



明日の計よりも眼前の計なきところへ我足の向きしは、佐竹が原に於ける繁昌の一分子たらむとせしにあらざして、目的は木賃宿にあり、下宿屋の支拂に窮せしもの、下宿屋の催促に苦しめられて小さくなるよりは、大手を振って木賃宿の御客様たるに如かず、木賃宿また雨露を凌ぐに足る、木賃宿また大志を宿すに足る、木賃宿の汚醜と人間の墮落とは別問題なりと、

當時この佐竹が原に最も有名なる木賃宿は、釘屋と稱して百人以上を容るべく、その次は大泥溝に沿へる信濃屋にして、寒風凜冽の夜十時前後、我々の門口へ立ちしが、實は大手を振って直に入る能はず、残念なれど心弱く躊躇して、三四度も無用の往復せし後、始めて身を投せり、普通一泊三錢、特別上等六錢、普通は一蓮託生の入れ混みにして、薄く固く冷き一枚の破れ蒲團を榲餅に餡の食み出る手足を縮め、特別は二疊の一

室に同じ蒲團なれど上と下との二枚ありて、かゝる社會には寧ろ絶えざる色餓鬼の男女その夢を結ぶ、

我は普通客となりて、いかにも屋根の下に雨露は凌げど、いづこよりか隙間を漏れ来る寒風に堪へ難く、鼻を撲つ異臭紛々、身を整す蚤と虱に苦しめられ、寐言、齒ざしり、鼾の聲、どこの馬の骨とも牛の骨とも知れざる奴の足を載せられ手を載せられ、終夜そのまゝ一睡も得ずして夜を明せしが、一切の過去を葬れる身にも萬感うた、胸に満ち、いかなる艱苦にも屈せざりし我、始めて辛しと思へり、

夜の明くるや否、森を離る、旅鴉の如く、あのく四方へ散ずる前、いづれも我を怪しみて、中に一人の無遠慮なる奴、おい洋服さん今日の飯代を取らして遣らうかといへり、もし善意に解すれば亦これ一片の同情心、

この洋服さんたる我、囊中は僅に七十餘錢あるのみ、まづ二十一錢を先拂



ひととして一週間の屋根代を濟ませ、一日六錢と定めて四十二錢の食料を除けば、剩すところ煙草一服と一度の湯錢も覺束なし、その一週間に、現在の木賃宿より新なる前途の運命を開き出さむとす、もし一週間に足らざれば、外套を剝ぐのみ、窮達消長の最後は、たゞ一枚の外套にかゝれり、

今にして思ふ、下宿屋を去る時、幸ひ前年の置き忘れし布子襦袢シャツの類三四枚ありしを、其まゝ下女に與へしが、せめて一枚の寢衣を持ち來らざりしは、我いまだ當時の境遇に細心の工夫を缺けり、

朝鮮行はチヨッキ一枚の紛失に蹉躓す、願はくは此外套一枚に四回東上の効果あれと、神にも佛にも祈らず我決心に誓うて訴ふ、

洋服のゴロ寝、洋服のゴロ起き、いよゝゝ我は木賃宿の洋服さんを以て呼ばる、四日目に雨の降りし時、宿の主人より破れたる番傘を借り齒の缺け

たる高下駄を借りて、一日一食のため表に出でし我姿を見送りし奴、西洋の鬼の寒念佛と笑ひしが、警句、寧ろ愛すべし、

番傘に高下駄の洋服を著たる姿のみならず、この時の我は其他の或意味に於ても亦これ鬼の寒念佛に似たり、絶えず心の鉦を叩いて自己の角を折らむとす、

一週間に考へ出せし生活の工夫は七八種ありしが、詮じ來れば依然たる佐竹が原を天地として木賃宿の産物たるを免れず、いづれも眼前の飢渴を凌ぐ以外に前途發展の道なく、この別世界にあるものとしては實に遺憾なき無上の名案なれど、この別世界を假寐の宿とせる我には、また竟に一枚の外套を脱がざるべからず、

もし一枚の外套を脱いで猶いまだ浮び得ざれば、まづ頭と足を剝いで帽子と靴とは屑屋の手に渡さざるべからず、さらに猶いまだ浮ばざれば背廣の



上著を脱がざるべからず、チヨッキはなしズボンを脱げば、久しく洗濯もせざるメリヤスのシャツと股引のみ、赤裸々といへるは一種の形容詞にして、身に纏ふ襦袢もなき實際の丸裸は到底この寒中に堪へ難く、乞食にも劣れり、

いかにしても我運命は、外套一枚に止めざるべからず、たとひ餘儀なき最後の極も、帽子と靴とに止めざるべからず、一枚の外套を以て大手搦手の城廓とし、古帽子と古靴とを以て大將の本丸とす、また哀れなる戦鬪にあらずや、

花柳の巷に立拳と稱する鬪拳の遊戯あり、おの／＼雙方より満座の中に立ツて相對ひ、その拳に敗るゝもの身に纏ふ衣類を一枚づゝ剥がれて、竟に丸負の丸裸とせらるゝ事あるも、男子は其まゝの禪一個に踊り出すの快あり美人は雪の肌ます／＼美に身を縮めて遁げ廻るの興あり、されど浮世の

敵に一枚づゝ剥ぎ取らるゝ慘憺は實に人間の窮極なり、うか／＼踊り出せば忽ち巡査に捕へらるゝ、

あくまで外套一枚の城門を固く守りて、まづ眼前の飢渴を凌ぐため、考へ出せる七八種の内、その最も平易に簡單なる一を選び、木賃宿の主人を説いて入口の板壁に張り出せし半紙二枚つゞきの文字は、手紙認め所、無論、振假名附なり、

かゝる社會に日用の文書文通は殆ど用なし、只その勞働者なるもの十中の八九は皆これ他國より流れ來りて、たま／＼故郷の夢を結び故郷の空を望むも、元來の無筆文盲は空しく涙を呑んで多年の音信不通となれるもの尠からず、我の手紙認め所こゝに起る、



されど由來この手紙認め所は多く賣卜者先生の片手業に専有せらる、是に於て我また別に一種の工夫なかるべからず、まづ開業の手始めとして、その夜の四方より歸り來りしもの三四十人の中に立ち、この洋服さん一場の演説を試みたり、

演説の主意は第一に人情の弱點を衝いて、堪へ難き望郷の念を起さしめ、また坊主臭く人間無常の果敢なきを説いて、今にも野倒死するか如くに落ち入らしめ、故國の空に行方の知れざる子を思ふ親心より、振り捨てられし妻子兄弟の雨につけ風につけての悲しき情愛に至るまで、殆ど一種の小説口調を以て巧みに饒舌り立てし後、紙筆料を五厘として一本一錢の手紙を廣告し、さらに附け加へて曰く、いかに親戚知己の怒るものありとも必ず其怒りを解いて意を和らげ、いかに申譯なき親兄弟へも必ず申譯を立て、心を慰め、その他いかなる難事も談判も我一片の紙筆は必ず諸君の豫

期以上に満足を與ふべく、わづかに附焼バン三串の一錢五厘を以て諸君のために多年の人情を盡すのみならず、あはよくば前途の運命を開かむとす、どう考へても損のなき事ならずやと、

自然の人情、彼等また木石にあらず、始めは好奇心と冷し半分聞きしが、絶えて久しき故郷の空を眼前に浮べて、その親を思ひ妻子を思ひ兄弟を思ふの極、おもはず首を垂るゝものあり泣くものあり、どう考へても損のなき事といへる結論は最も彼等の頭腦を刺戟し、附焼バン三串の一錢五厘といへる一語また最も彼等の現在に直接の感動を與へて、我もくと依頼するもの即座に二十餘人、その甚だしきは十年以上、尠くも二三年以來その音信を故郷に絶ちしものなり、

餘儀なき無筆のため三年五年の音信を絶ちし彼等よりも、この自由自在なる筆を以て一人の母に猶いまだ一書の快報を呈し得ざる我みづから我を恥



ぢ、わづかに一錢五厘を以て空しく他人のために文を作れる我境遇を思へば、無量の感慨に一滴の涙なき能はず、されど我演説を聴きし木賃宿の主人は、案外の流暢なりし我辯に驚きし上、また我筆の早きに驚き我文の走るが如きに感じて、あの洋服さんは尋常の洋服さんにあらずと吹聴し、一蓮託生の有象無象も我を稱して、誰いふとなく先生と呼ぶに至りしが、先生の頭においの一語を加へ、おい先生と呼ばれしは、猶いまだ多少の輕侮を以て迎へらる、二十餘本の手紙に四十錢近く得たるのみならず、その翌夜は我に向うて、おい先生、何か面白い談話をしてくれないかといふ、もし今日ならば浪花節でも語れといふの意味なり、我また無聊に堪へざるの時、興に乗じて豊太閤の傳記中、その幼少に口を開き松下嘉兵衛の許に至るまでの間を、最も彼等に解し易く一種の談話的に演せしが、常に彼等の聞き馴れたる張扇

の講釋師よりも寧ろ耳新らしき興味に拍手喝采の結果、二十錢を集めて贈られしは、時に取ツての滑稽なり、頼まざれど彼等の喧傳せる廣告は、まづ百人以上の宿泊せる釘屋を始めとして、その他より手紙を依頼し來るもの必ず日に平均の三四人づゝあり、中には親兄弟にあらず妻子にあらず國に残せし情婦の無情を恨みて刃物三味の強迫狀これには聊か閉口せしのみならず、をりくまた例の太閤記を乞ひ來りて、聴衆の一人前五厘づゝと極められしには、流石の先生も再び演ずる勇氣なし、

時に應じ境に隨ひ飢渴を凌ぐの道はあれど、飢渴を凌ぐがための我にあらず、幸ひに外套一枚の城門を守り得たるも、たゞ徒らに木賃宿のため失は



ざりしのみ、加之も前途に希望ある身を以て營養を缺き衰弱を來すは第一に最も我の恐るゝところなり、  
 心ならずも馬骨牛骨と相伍して、おい先生と呼べるゝこと殆ど數十日、その間また飢渴以外に多少の面目あるべき數條の活路を案じ出せしが、冷靜なる頭腦を以て打算するところ、結局いづれも再び過去の我經歷を繰り返すに過ぎずして、一も新たに光輝ある前途の道を開き得ざりし我みづから我を叱咤すれば、そもゝ何がために本郷の下宿屋を去つて木賃宿へ落ち來りしや、  
 さらに我また我を喝破して曰く、直に去るべし、他日この木賃宿をして、無用の徒勞に歸せざらしめむとすれば、一刻の猶豫なく猶更ら直に去るべし、たとひ現在以上の艱難を極め落魄を重ねるとも、前後左右の顧慮なく墓地に去るべし、沈思默考せず脱兎の如くに去るべし、躊躇逡巡せず疾

風の如くに去るべし、いづれの點より見るも汝の今日は只これ動くに利あるのみ、いかなる思慮を費すも汝の將來は只これ進むに利あるのみ、をりをり出來損ひの講釋師となり一錢五厘の手紙を認めて露命を繋ぐよりは、蕎麥屋の出前持となり湯屋の三助たるに如かず、おい先生と呼ばれて振り返るよりも、この畜生といはれて働くに如かず、もし白き飯を食うて黄色の糞するばかりを生活の藝當とすれば、生意氣に官途を嫌ひ月給取を嫌ふの理由と主意といづくにある、もし徒らに飯袋子たらむとすれば、わざ／＼始めより詰め込む手数を省いて、一日も早く飢死するに如かず、ぐづ／＼入らざる腕を組み首を捻るよりも、さつさと尻を騰げて脇目も觸らず驅け出すべし、咄々この際に於ける汝の進退をれ奈何、



三月中旬、いかに辯護するも我誇りとならざる木賃宿は生涯これを最後として、佐竹が原の大泥溝に沿へる信濃屋を立ち出でしが、出づる時、敵の面の皮を掻き撈るが如く、その入口に張り出せし手紙認め所の文字を引き破り、出づる前日、もはや我より城門を開いて突進する勢ひに今まで固守せし外套を賣り飛ばせり、得たるところは僅に二圓二十錢なれど、古帽子と古靴の頭と足を取られざりしは、いまだ世の中の方角を失はざる前兆に似たりと、聊か自ら我を慰めて去れり、

去るに臨み、数十日の馴染を重ねし木賃宿の主人、頻りに同情を寄せていふ、もし行く先の的がなければ幸ひの筆達者だ、どツかの帳附にでも周旋してあげませうかと、我その好意を謝して出づ、

無論その頃は都下の新聞紙上いづれにも職業案内なるものなく、たとひ紛れ當りにも坐して飯の種を探し得られず、名高き芳町の口入屋また身元引

受なくして明りに人を扱はず、いよいよからなれば職を擇ばず何でもするといへど、その何でもする時は何の業も仕事もない時にして、人間この實況に落ちざれば到底この實際を知るべからず、されど我その實況に落ちしがため只その實際に動き得ざるま、茫乎と立往生すべき時にあらず、外套を賣り飛ばせし二圓二十錢を片手に掴み、片手に前途の運命を追うて、大膽不敵の眞一文字に幕進せり、

もし我をして世間の所謂苦學生なるものたらしめば、彼等よりも徒勞抄くして効果の多きを取るべき工夫に窮せず、もし我をして只これ一身の生活営むに止めしむれば、また世間普通の其日を無事に送るものよりも寧ろ多少の進める活路なきにあらず、もし我をして一切さらに他を願みざる



黄金萬能の崇拜者たらしめば、豺狼の如く義理人情を没却せずして相應の金溜主義を實行せむとする道にも闇からず、されど我には別に一個の我なるものありて、殊更ら前途の艱難と戦ひ將來の辛苦と闘ふべき決心を有し、その決心を行ふには當時の我この外套を賣り飛ばせし二圓二十錢の外に甲も鎧もなく弓も矢もなし、

この二圓二十錢を甲冑として人生の戦場に向ひし我は、この二圓二十錢を以て生死の境に背水の陣を布けるが如し、

他日の我、當時の我を顧みて、感慨に堪へざるの極、人生に於ける背水の陣を説ける一文あり、

人の世にあるを戦場にあるが如しとすれば、凡そ人間の一代を通じて百戦百勝は實に稀なり、

もし百戦百勝ありとすれば、一代を通じての百戦百勝にあらず、たゞ

一事一物に對して或期間の百戦百勝なり、

人の一代を誇るべき大戦争は、百戦一勝すら得難くして、百戦百敗に終るもの多く、諺に七轉び八起きといへど、七たび轉びて八たび起き上るものは、最も勇士の部なり、たとひ弱卒ならざるも戦ひに利あらざれば、一たび轉びて其まゝ半分も起さざる事の出來ざるもの、世間いたるところに擧げて數ふべからず、いはゆる一敗の地に塗るゝもの多し、

されど社會を間斷なき戦場とすれば、これに活動すべき人間いづれも將士おのゝその分に應じて戦はざるべからず、戦はざれば敗るゝ以上上の侮辱を蒙りて、殆ど死人同様の取扱ひを受くべし、つまり戦争が怖いとて首を出さぬ奴は世の中に用のない奴なり、

既に世の中を戦ふものとすれば、誰も彼も自然の人情、なるべく敵陣



の弱くして分捕品の多きところを規ひ、その不意を襲うて思ふ存分の功名手柄を現はさむとすれど、もし斥候を過り方角を取違へて案外の剛敵に出逢へば、自己まづ分捕の憂目に逢はざるべからず、今日の間、間に悪戦苦闘の語ある所以は、いづれも皆この剛敵に向ひし不運な奴なり、

但し、強敵に向はざれば大なる凱旋すべき筈なく、あけても暮れても同じ相手に毎日の小競合は面倒なりと、生涯の運試しに、自己が兵力以上の大戦争を起すもの、世間また妙からず、俗にいふ乗るか反るか、の戦ひ、算盤の桁外れに一か八かの藝、大業にいへば乾坤一擲の大膽なり、

戦ひの勝敗は別なり、作戦計畫は強ち數字の比較表にあらず、寡を以て衆を破り小を以て大に當る、人生の痛快こゝにありとするもの、常

識の判断より見れば頗る危けれど、その危さがために常識の判断に及ばざる意外の效を奏すべく、これを世に背水の陣といふ、

一代の富豪、一代の盛名、一代の大業、その他いづれも自己の一代を以て他人の數代以上に於ける成功を眼前に併せ得たるもの、多くは皆これ背水の陣を張りしものなり、

背水の陣は殆ど死地の陣なり、

たとひ死地に陥らざるも、みづから死地に陥りて戦はむとするもの、いはゆる戦ひに臨みて生還を期せざるの勇なり、

生きて再び還らざるの勇氣と覺悟とを以て、自己を死中の一活に求む、もし幸ひ其一活を失はざれば、人間これ以上の餘力なき死を賭して得たるものゝ大なるを知るべく、つまり背水の陣は捨身の術なり、

たゞ物質上に於ける近き獲物のみに止らず、名を竹帛に垂るべき古今



の忠臣義士なるもの、その事に臨みては、悉く捨身の術なり、そもそ  
も死を恐れて英雄豪傑の生すべき筈なく、聖賢その道に殉し、偉人そ  
の生命を主義に投ず、藝術の巨匠名士また藝術のために死すべき覺悟  
なり、

この理に於て背水の陣を張らざれば大なる目的を遂げ難し、前に大敵  
あり後に急流あり、退くも死すべく進むも死すべく、前後ともに死は  
一なり、この時その際その死を決するもの、遁げて水に溺るゝよりも  
吶喊して敵に向ふの外なし、

身を捨てゝこそ浮ぶ瀬もありといふは、もはや四方に援なき人間の窮  
極を脱すべき唯一の方法なり、捨てもせず浮びもせず同じ窮極に生涯  
を苦しむもの、世間その例に多し、

されど只これ背水の陣を張るもの悉く大なる獲物を得べきにあらず、

まづ背水の陣を張るべき大目的を定むると共に、また背水の陣は危機  
一髪の間であり、いたづらに背水の陣を張りて其まゝぐづぐづすれば、  
前の敵に逆寄せられ後の水は背より肩を越すべし、

背水の陣も肩越の陣となれば、さらに何の効なきのみならず、殆ど滑  
稽の陣なり、

成功を期せる半面に失敗の用意あるもの、その心の周到を賞すべき  
も、用意は或意味に於て所謂二の足を踏むものなり、二の足は通  
路にして、加之も用意の餘裕あるべき事に背水の陣を張るべき必要  
なく、これを張らむとするほどの目的に向へば、男子こゝに意を決し  
て後を振り返るべからず、勇往邁進、みづから遁路を絶ちて大に戦ふ  
べし、

この勢ひを以て社會に戦へば、戦ふ時の自己は戦はざる時の自己以上



に幾倍の力あるべく、その力の及ぶかぎりは凡そ世の中に何事か成らざるべき、背水の陣こゝにあり、  
この一文は二十餘年の後、我みづから當時の我を嘲りし一種の懺悔文に等しきもの、今より靜に考ふれば、強ち背水の陣を張るに及ばざりしのみならず、その背水の陣また果して前の敵に逆襲せられ後の水に肩を越されて肩越の陣となり、竟に滑稽の陣たるに終れり、

佐竹が原の木賃宿を飛び出せし以來の我は、例の二圓二十錢を人生に於ける車輪の根軸に注ぐべき油とし、向ふところ到るところ最も大膽なる背水の陣を張れり、

明治二十二年の三月より翌二十三年の九月に至るまで凡そ一年半の間、事

々物々に悉く捨身の業を用ひ、いまだ曾て二の足を踏みし事なく、絶えず常に呐喊して大に世の中と戦へり、

この一年半の間に於ける我は、あらゆる人間の辛酸を嘗め盡し、あらゆる人情反覆の表裏を出入し、あらゆる世上險惡の行路を往來し、その境遇を變せしこと十四度、殆ど月に一度づゝ轉々せるが如き結果を経來り、その飢渴に迫りしこと前後三度、その最も甚だしき時は絶食三晝夜に及びしが、また一面に於て多少の成功なきにしもあらず、只その成功に安んぜざりしと只その成功を守る能はざりしがため、また忽ち我手に押し崩し我足に踏み潰して、竟に再び救ふべからざる最後の大失敗を招けり、

もし當時に於ける『我一年半』を著はさむとすれば、この『我五十年』よりも寧ろ更に幾層倍の大部冊となるべし、されど其大部冊たる内容は、あまりに青年讀者の好奇心を唆るが如きもの多く、あまりに青年諸子をして



知らざるに如かざるべき事を知らしむるもの多く、我また當るを幸ひ實際の縦横無盡に浮世なるものを薙ぎ廻りし振舞の慚愧と後悔とに堪へざるがため、いはゆる背水の陣を張り損ねたるに結論し、いはゆる捨身の業を繰り返せしに止め、竟に事實の蔽ふべからざる失敗の二字を以て此一年半を葬り去るべし、

### 報知新聞

曾て我は民間の政治家たらむとせし時、最も便利なる必要の第一に數へて、この新聞社なるものを深く腦裡に印せし事ありしが、その後は只これ熱心

なる讀者といふ以外、いまだ新聞社に何等の目的なく何等の希望なし、されど人は思はざるところに思はざる不思議の縁ありて、人生また豫期せし事よりも寧ろ豫期せざりし事に運命を繋がるゝもの多し、明治二十三年、我二十六歳の十月、過去一年半の惡戰苦闘に弓は折れ矢は盡きて、的もなく兩國橋を渡り、ふらくと薬研堀に來りし時、その角に報知新聞社あり、

この時は失敗また失敗の極、新聞一枚の讀者にもなり得ざりし我にして、その社前に佇み、掲出せる其日の報知新聞を読みしが、たましく窮迫せる境遇の餘儀なき力は、我に道を選ぶの違を與へず、眼前この新聞社に食を求めしむ、受附に入りて、編輯長を問へば、森田さんといふ、その森田さんに面會を乞へば、名刺を出せといふ、名刺なし、鉛筆を借りて紙片に我姓名を記し、



その左端に書して曰く、御繁忙中恐れ入り候へども寸刻の座を御左右に賜はりたく候、

やがて給仕に導かれ、左側の應接所に待てば、出で来りし森田さん、我名刺と我容貌とを見比べて、その來意を問ふに對し、窮迫の一寒生、願はくは食を得たし、職工の見習ひ小使の下働き、敢て辭するところにあらずと答ふ、

名刺の端に書せし一文と職工小使を辭せざりし一語に思はず同情の念を惹き起されたりとは、後に始めて本人より聞きしところ、この森田さんを其ころの文壇に噴々たる思軒居士なりとは、我また採用せらるゝ時に始めて知り、

思軒居士と對談せしこと凡そ十二三分、その間に多少の我を知るところありしか、去るに臨み懇懃に送り出していふ、今は校正の外なし、もし校正

ならば明日より來らるゝも差支なしと、當時の我は本所の元町に住めり、たゞ一言を以て本所區元町の十五番地に住めりといへば無事泰平の如くなれど、いはゆる向兩國、回向院の門前、今も現存せる右側に花屋と稱して、江戸時代より古く相撲番附を賣れる家の二階借、梯子段を上りて右に入疊の一室あれど、その入疊敷は我ための入疊敷にあらず、左に三疊の物置ありて、その物置の餘れる一疊半の破れ疊を我峙とし、つい鼻頭の向側は有名なる坊主鶏肉屋、絶えず空腹に朝夕その匂ひを嗅げるのみ、

翌日、薬研堀の報知社へ行けば、校正掛の先輩まづ經驗なき新參の我に向うて、校正の地位は低けれど校正の責任は頗る重き所以を説き聞かせ、當



分の見習生として席を與へらる、  
 校正の席は編輯局の入口右側の片隅にありて、その机も椅子も記者先生と同じからず、同輩四人の内、新參の我は最も片隅の片隅に押し寄せられ、いよ／＼小さくなりて編輯局を見れば、校正四人の席は殆ど記者二人の割合に當り、さらに我は校正一人の半人分に押し詰めらる、記者に對しては正に是れ四半分の人間、花屋の二階住居と一般、當分は一人前として家の中央へ出られざるものと苦笑せり、  
 其ころ報知新聞の社長は、龍溪の矢野文雄、編輯長は思軒の森田文藏、政治記者として、箕浦勝人、加藤政之助、小栗貞雄、竹村良貞、上遠野富之助、枝元某、山口某、その他に名を忘れたるもの四五人、いはゆる三面記者として、また文學者として、さらに小説家としては、村井弦齋、遅塚麗水、原抱一庵、外國新聞の翻譯掛として林某、活版印刷の器械工場を統轄せるは

三木善八、事務の人は會計の飯田某以外その名も聞きし事なし、  
 校正は他人の書ける原稿を活字の下摺に引き合すのみの藝なれど、この藝たるや容易なるが如くにして實は甚だ難く、難きにあらず實は甚だ蒼蠅く煩はしく面倒なるものにして、煩る我に適せず、加之も悉く名筆の名文にあらずして、中には拙劣の遅筆を閉切の時間に追はれ元來の不文ます／＼不文となり、殆ど判斷的の拾ひ讀みに苦しむものあり、されど多年の經驗ある校正の先輩は一字一句も過らざるに反し、新參の我は翌朝の新聞紙上、めちや／＼の過誤ありて、記者には叱り飛ばされ同輩には小言を浴せられ、常に絶えず内外一時の面目を失ふ、  
 たゞ我の人に譽められしは、午前十一時ごろに出勤すべきを朝の六時より來りて、午後は夜に入り人なきに至るまで歸らず、校正は至つて下手なれど勉強するだけが取柄なりと、何ぞ圖らむ、實は物置の餘れる一疊半の薄



開き二階に閉ぢ籠るよりも、或一定の時間中に小言をいはるゝ辛抱さへすれば新聞社の樓上に終日を送るの快あればなり、加之も都下あらゆる新聞を読み四方より寄贈の新刊書籍と雑誌類を読むの便あればなり、あまり我には心持よき返事せざれど給仕を呼び小使に命じて湯も茶も自由に飲み得べき都合あればなり、第一に晝飯の辨當を月末勘定といふ信用の端に連り得るがためなり、されど憐れむべし、我その時の月給は五圓、その辨當は三錢五厘、たま〜五錢の天どんを以て無上の奢りとす、幸ひに生命は五圓の月給に繋ぎしも、衣服は校正となりし翌月、乃ち十一月三日の天長節に古シャツ一枚と洗ひ曝せし紺紵の單物一枚を纏ひしのみ、給仕も小使も我のみに心持よき返事せざりしは當然の理にして、編輯局は固より活版職工にも輕侮の眼を以て迎へらるゝ、されど一の新報社中に嘲笑され輕侮さるゝを堪へ難き恥辱とするには、尠くも我に過去十年の苦勞

なからしめざるべからず、敢て面の皮の厚さにあらず、實は人の知らざる心の底に寧ろ我より彼等の狭くして小さき世界を嘲笑し輕侮し、社會の耳目たり木鐸たるにも拘はらず、案外その坊ツちヤンたるところ多さに驚けり、

十一月六日、思軒居士より月給以外の五圓を與へらるゝ、竊に曰く、聊か君のため寒を防ぐに足るべきかと、我その好意を謝して、直に柳原より綿入の羽織と布子一枚を購ひ來り、始めて社中に笑はれざるものを纏ふ、されど柳原の吊し店に曝されし古著、猶更ら笑はれしやも知るべからず、

明治二十三年の十月より翌二十四年の三月まで、凡そ百五十日の間、その最初に比して多少の馴れたるところあれど、なほ依然たる間違の多き下手



な校正として編輯局の片隅にありしが、一日、思軒居士、いはゆる文學記者の机を並べし前に向ひ、諸君、いよ／＼來月より日曜毎に新聞の附録として『報知叢話』なるものを發刊せむとす、まづ第一に小説を主とし、その餘白は文學に關する内外の記事を以て埋むべし、幸ひ諸君の勞を乞ふ、あ／＼大に詩藁を開いて多年の蓄積を發揮されたと、さらに片隅の我を顧みて曰く、どうです村上さん貴君も何か小説を一篇、書いて下さらなにか、きつと貴君なら一氣軸を出した尋常以外の面白い小説が出来ませうと、我これに應じて曰く、随分これまで人に負けず恥を掻いた事はありますが、まだ生れて小説といふものを書いた事はありません、しかし別に大した業でもなし、なアに書けば書けるでせうよ、一番、洒落半分に遣つて見せせうかと、社中いづれも思軒居士の顔を打守りて我の無遠慮なる返答に驚けるが如し、

苟くも我は文學を以て生命とするの念なく、實際また其當時に於けるまで小説を読むの閑日月を得ずして、たゞ大阪の源光寺にありし時、たまたま馬琴の八犬傳と上田秋成の雨月物語と、支那の小説として燕山外史を讀みしのみ、去年の十月、この報知新聞社の校正となりし以來、その朝夕を利用して雜誌類を読みし傍、始めて現代の小説家に著述されしものを読めり、  
 幼少より歴史に最も深き趣味を有せしため、その歴史に關する野史稗史の類は、いたるところ常に和漢の書を涉りて、既に世間へ刊行されしもの殆ど餘すところなかりしも、いはゆる單に小説なるものは、この報知社に來りて後、始めて讀めり、加之も好みて讀みしにあらず耽りて讀みしにあら



ず、たゞ用なき徒然の手に觸れて讀みしのみ、

新聞社の校正のみならず、現代的の小説に於ても、かくの如き無經驗なる新參の飛入にして加之も熱心ならざる讀者の身を以て、思軒居士の不意に發せし一言に對し、その小説家たるは別に大した業にあらざと答へ、なアに書けば書けませうよと平氣に手軽く引き受けし我は、決して一時の負け惜しみにあらず、また一時の豪語にもあらず、さらに一時の安請合にもあらずして、實際その通りに思ひ、思ひしまゝを其通りに答へしなり、

他日の我には別に多少の感想と主義主張あれど、當時の我この小説に對して思へらく、専門の科學は専門の智識を要すべきも、もし小説なるものを文學上に於ける一種の娛樂的とし、また或意味に於ける一種の人生觀とし、さらに自由自在の理想人物を主人公とし、これに世態人情の解釋を

施すものとすれば、恐らく今日まで他人に劣らざる艱難辛苦を嘗め盡して、あらゆる世態人情に接し來りし我、寧ろ土百姓の手間取となりて茄子や大根を作るよりも易き業なりと信ぜり、いたづらに人の原稿と活字とを引き合して小言をいはるゝよりも我々、勝手に面白く出来る藝なりと思へり、そも、學校の卒業證書を以て價値の高下を定めらるゝ點には頗る閉口の小説家たるも亦これ人生の滑稽なりと思へり、いと洒落に一時の小説家たるも亦これ人生の滑稽なりと思へり、苟くも今日の文士たり小説家たるもの、中、かくの如き横著なる不敬の念と根柢なき其場の出來心とを以て、ひよこりと立ちしものは、斷じて一人もなかるべし、もし眞面目に神聖なる文學思想より厳しき詮議立に逢へば、その罪なかく、以て輕からず、必ず土中の生理にせらるべき當時の



我なり、

されど當時の我また眞面目に考へて、もし新聞社に離るべからざる縁ありとすれば、心にもなき小説家たるよりは、寧ろ政治記者たり經濟記者たるべき筈の分子を多く含有せり、

露國文學を以て名を知られし二葉亭四迷が死に至るまで生涯その文士たるを恥ぢしといふ一事に於て、我は最も深き同情を寄せたり、さらに二葉亭四迷と稱せしは、幼少のころ常に親父より叱られし言葉に、くたばつて仕舞へといはれたるを取りし洒落なりと聞き、さらに彼の志その他にありしを思うて、ますます同情の念に堪へず、

我の小説三四冊を世に出せし後、春陽堂の樓上に尾崎紅葉と始めて相會せし時、彼その苦心慘憺を語りて曰く、讀賣新聞に掲載せる一回の小説原稿は尠くも半日の推敲を要し、をりく夜を徹して曉に及ぶと、我は云ふ、

小説ぐらゐに人間大切の腦を絞りて堪るべきや、一氣呵成、くしやくと書きたくるべしと、彼は我の大膽なる無鐵砲を笑ひ我は彼の神經過敏を笑ひしが、實際また紅葉の原稿は縦横に抹殺し前後に張紙を重ねて殆ど原文を餘さざるに至る、實に文章のため一代の心血を注いで死せしもの、事に荒まず道に忠なりといふべし、されど我は紅葉よりも四迷を以て我心を得たりとす、

四月五日、報知新聞の日曜附録として發行せし報知叢話の第一に、ちぬの浦浪六の名を以て『三日月』といへる一篇の小説を掲ぐ、ちぬの浦を用ひしは、泉州の堺に生れたるがためにして、近き東京附近の一例、三河島に生ずるを三河島菜と稱し練馬に生ずるを練馬大根といふが



如し、始め茅浦とせしが、茅浦の文字に拘泥して仔細めくよりは其まゝ露骨に正直に解し易く、ちぬの浦とせり、されど單に只ちぬの浦とすれば、聊か相撲取の名に紛らはしきより其下に語呂を續けて浪六とせり、浪六の二字さらに何の意味も絲瓜もなく、浪七とし浪八とし浪九とするも同じ、實際の姓名さへ人間の間違なき符牒と心得たる我、小説の雅號に彼是と入らざる無用の心配すべきや、加之も意味深き閑雅優美の文字は既に古人の搔き搜せし選り屑と喰ひ荒せし糟粕にして、いはゆる現代の雅號なるもの、これを昔に遡りて穿鑿すれば、いづれも多少の類似せるもの多し、保元平治の亂、源の爲朝に任官せむとするや、冷かに笑うて曰く、我は鎮西八郎にして可なりと、頼山陽その意氣を吟じて堂々源家第八郎と稱せり、我に爲朝の力なきも、殊更ら深遠幽玄の文字を擇ぶの必要なく、ちぬの浦浪六を以て満足せり、

また『三日月』の作意と内容とに至りては、ちぬの浦を冠せし浪六の名よりも更に簡單なる無雜作なり、いはゆる自然主義なるもの猶いまだ行はれざりしが、戀愛小説の盛なりしがため、我その戀愛を避け、花柳の情事に興味を呼びし小説の多かりしがため、我その香粉を避け、華族の内訌を背景とせるもの尠からざりしがため、我これを避け、窮巷の悲惨を舞臺とせしもの競り合ひしがため我これを避け、粹人通客の一席談を取次ぐが如きもの混み合ひしがため我これを避け、その他いづれも一般の傾向は風流的の淫逸に流れ技巧的の纖弱に流れ動もすれば餘り太平無事の昏睡惰眠に陥らむとする状態ありしがため我これを避けて、聊か御座敷向の上品なる奴にあらざれど、こゝに三日月治郎吉といへる一個の武骨漢を罷り突ン出せるのみ、結局は衆人の南に走るがため我は北に走れるが如し、お料理に飽ける面前へ、鱈の鹽焼を出せるが



如し、加之も、この『三日月』を出せしは、報知社の朝夕に始めて現代の小説を讀みしのみ、眼界より來りし産物なり、もし我をして、更に廣く多く熱心に讀ましむれば、この『三日月』以外の著述を出せしやも知るべからず、もし我をして、報知社の朝夕その手に現代の小説を觸れざらしめば、この『三日月』また世に出でずして已みしやも知るべからず、春秋の筆法を以て曰く、報知社に寄贈せる小説本幾冊、こゝに浪六をして『三日月』を著はさしむ、

寧ろ我運命に無用の小康を與へしものは『三日月』なり、寧ろ我志業を永遠に過らしめしものは『三日月』なり、寧ろ我前途を遮斷せしものは『三日月』なり、

日月』なり、

『三日月』一たび世に出で、浪六の名を知られ、加之も豫期せざる案外の歡迎を受けしは、實に我生涯の不幸といふべし、誤つて文字を將つて人に知らるゝの歎、豈それ古人のみならむや、春秋回首二十七、正是臥龍始出時、我また當時二十七歳、

國を去つて十年、事は志と違ひ身は運命の神に弄ばれ、思はざりき一部の小説によりて名を爲さむとは、されど我不幸は他人の關知せざるところ、他人の目より見たる小説家としての『三日月』は私の處女作なり、以後の著述中、聊か心を用ひしものあれど、この不用意にして幼稚なる『三日月』は我生涯の令癡符として、殊更こゝに其全篇を掲ぐ、

眞實を以て我は天下の青年諸子に訓戒すべし、人間行路の最も恐るべきは



大艱難にあらずして眼前の小成功なり、人生利害の最も岐るゝところは生死の境にあらずして現在の小得意なり、

所謂彼の町奴、六法むき、男達などいへる者の一生を見るに、その野卑にして且つ愚なること殆ど兒戯に似たれども、人に骨なく腸は魚河岸にのみある今の世に、豈に半文の價なからむや、

徳川の流れに花をうつせし寛文二年寅の七月、奉行所よりの町觸れに、「町人若きもの大額取り候者有之、自今已後無用可仕事」とありしを五十餘年の昔と見て、正徳のする享保の頃、又もや唐犬額に板倉屋源七が餘波の障子鬢かき上げて銀の針線を元結とし、身の拵へ

衣裳の作りは小唄に残る深見十左を其まゝ、繩鼻緒の駒下駄に江戸の八百八町を踏み鳴らし、男の中の男と立てられし治郎吉といふ六法むきの臂突あり、辱しめを受ければ飛ぶ鳥おとす大名の行列を遮つて數百の武士を敵手に腕を叩き、義に感ずれば非人乞食に膝を屈めて三尺の小兒にも禮を缺かず、十四歳の頃、日本橋にて一人の武士と物いひ争ひざま、雨あがりの泥脛あげて蹴付けしかば、武士は髪逆立つばかりに憤りて治郎吉が腕首を捉へ、無殘にも其兩手を欄干の上に重ね置き、刀の小柄抜き取りて田樂刺しに、ずばと打ち付けたり、性來無雙の不敵ものなれど、未だ十五に足らぬ身の何とて堪るべき、みるゝうちに顔の色青く唇も紫を帯び、黒血ながれてポトリ／＼と川に滴るを武士は冷笑ひつゝ、  
「小童奴、痛むか、その代り小柄は汝に呉れる」



其まゝ五六歩行き過ぎむとせし後より治郎吉聲をかけ、

「待ツたお武家、いよくこの小柄呉れるか」

意外の一言に流石の武士も荒膽ひしがれ、立ちかへりはしたれども呆れて答へなし、治郎吉は血走る眼を上げて、ジロリと武士の面を睨み、

「有難う御坐います」

いふや否や必死の力を込めてエイとばかりに雙手を引けば、ベリベリと音して紙を裂く如く、縫はれし縁は離れて己が手に戻れど、小柄は尙ほ依然として血糊のまゝ橋の欄干に残れり、山なす群衆は凄みに打たれて言句なく、武士は草履脱ぎ捨て、一目散に逃げ出すを見るより、掌の真只中より指の股へ掛けて割り切つたる儘の手に小柄を抜き取り、

「サンピン待ツた禮をいふ」

と叫びつゝ跡を追ひし治郎吉の振舞ひ、あはれ此の魂ひ身丈と共に延びなば行末いかなる者となりやせむ、恐ろし〜と身の毛を立てて江戸中の噂に騒ぐことスリ半鐘の音より高く、其ころの大俠客むさし一文字といへる者に養はれけるが、かの疵痕さながら三日月の如くなりしかば、是より人みな治郎吉と呼ぶ者なく『兩手の三日月』とて二十六の曉には數百の撥鬚奴を養うて大達者となり、同じ流れの男を磨きし花川戸に家を構へ、もろ脛を風に吹かして市中を横行しつ、弱くば除けて通す強くば手鞠に取らむ、懐中の白紙二帖は見てくれにあらす、腰に落す三尺無反は伊達にさゝぬ、二百六十餘の大名にもあれ八萬八騎の旗本にもあれ、いざといはゞ屍の山を積んで血の雨ふらしくれむ、頼まれて諾といはゞ命に熨斗つけ



て其の場で進上せむと、花の大江戸に只ならぬ一種の花を咲かして  
けり、

秋の入り日は尙ほ山の腰に茜の模様おさながら、麓の森を覗く鎮守の  
片割作りより早や暮れかけて、續く藪越しにチラ／＼見ゆる燈火は、  
村の媼が蟲の音に負けじと縋縋さすにや、賤の乙女が冬來ぬらむと  
心いらちて夜機織るにや、群に離れし後れ鳥の一羽二羽、あわたゞ  
しげに羽ばたきして戦ぐ稻田の細路に、面白き桔梗刈萱を會釋なく  
踏み躪り、ひけば靡く女郎花の裾に當るも頓著せず、景色がら風流  
人が見なば泣きも出さむ武骨の竹刀肩に打かけて、脇見もやらず、  
のッさ／＼と歩み行く大の男あり、

漸く近づきて薄萱草生ひ繁る村外れの小家が軒に立ち止りしが、浮  
世に架なき獨身の氣樂さ、今歸りしともいはず、曲みし柱に掛けた  
る繩鍵を指もてフツとさきり、荷ぎしまゝの竹刀の革柄に戸を推しあ  
けて内に入り、暫し手探りに何をか求めしが、舌打ち鳴らして破れ  
窓より顔さし出し、

「婆さん、向の婆公、火打石と火奴を貸して呉れ、頼んで置いた  
飯も持て來い」

音太さ聲にて五六度呼べば、聽て遙の向に板金剛の音して提灯片手  
に飯籠さげし一人の老女、

「歸らしやツたか、今日もさつのお手柄であらう、今も今とて若  
い衆が寄り合うてお前様の噂、城下のお武家が東になつても叶  
ふまい、これから村に悪徒が暴れ込んでも心配いらぬ、其れは



其れとして嘸お腹が空いたことではな、夜食すんだら又來てお江戸の談し聞かして下され、忪も嫁も樂しんでな」

「いや左様も行くまい、しかし此の城下では手應へする程の者にまだ逢はぬ、試合に勝つて看板踏み碎くか酒代呉れるかと、道場破りの罪な商賣も近ごろ頓と面白うない」

談話のうちに老女は行燈に火をうつし、枯柴を爐にうちくべ、何くれとなく心づくして立去るを、男は飯籠ひき寄せて箸とりながら、

「あゝ、田舎ものに他人ないとは能く云つた」

獨り言ちつ、飽くまで食を終へ、もろ脛なげ出して己が拳に叩き始めたり、

この男なもの、燈火の光りに照らす様みれば、『名月や來てみよがしの大額』身の作り衣服の地なども色目立たず、髪さへ世を忍びて

豆本多に結ひたれど、ざり〜の穴まで抜さ上げて額角を錐鋒にせる跡は、隠せど紛れなき臂突きの大達もの、棕栲柄に赤銅の合せ鍔とところ〜に板金入れて布卷の叩き鞘に銀の責め五つまである長脇差は、命賣りし金看板の形見にや、色淺黒き三十七八の骨太に、苦み走つて眼銳き面魂ひは只とも見えず、兩の手の裏表かけて三日月の疵痕あるこそ大江戸に一名物といはれし治郎吉が身の果とはいはで知るべく、三年まへ飛鳥山の花さく中に物いひかけて旗本十七人を斬りしが、異なる奉行のなさに惜しまぬ首を貫うて江戸の砂を跡足に蹴りつ、行方しれずと聞えしが偕は尙ほ浮世に住みて、この山里に身を置くなりけり、

『よき買手御坐候へば何時にても此の命賣り申し候、但し現金取引のこと、晦日ばらひは前以て御断り申し置き候』と薩摩の白上布に墨



くろくくと認めたる帷子を著て、皆朱に三日月を染め抜いたる大團扇あふりながら、大道狭しと肩怒らして江戸の市中を横行せし男も、笑止や眼前の草臥に堪へかねて頻りに膝を叩き居たりしが、軒端に集く蟲の音漸く冴えて、更け行く秋の夜の月山の端にかゝりしと覺しく、破れし窓を漏れて此方の戸袋に怪しき影をうつしぬ、なに思ひけむ、あゝと溜息つきて起ち上り、行燈片よせ夜具をのべ枕をおき、やがて庭草履穿きて門の戸際に立寄りしが、此は心なき身にも優しや月を見むためか、何心なく戸を引き開けて顔さし出す鼻頭へピカリと光りし白刃の鋒、南無三、流石に駭きながら慣れし石火の掛引に間一髪も容れず、はたと戸を閉ぢて脇差取らむと振り返れば、曲者は内にもありて天井の方より音もせず飛び下りて蹲りたるは必定手練の敵、ござんなれ、江戸を出でしより夜晝鳴つて堪らぬ腕

だめし、刃物なくとも手捕にしてくれむすと、庭より躍り上るや否、猿臂を延ばして引ツ攪み、エイヤとばかり矢聲を擧げて後へ投ぐれば、敵は柔術の秘訣を極めしものか身の軽きこと毛の如く紙の如く、力餘りて投げし主は後ざまに挫と仆れ、曲者は又音もせず庭に蹲りぬ、  
ウヌとばかりに跳ね起きて上よりムツと組めば、こはそも如何に、敵は人間ならで己が一枚の布子なりけり、思へば宵のほど壁の上なる釘に吊しおさしを、力に任せて戸を閉ぢし響きに落ちたるなり、あたら無駄骨折つて我ながら呵しと笑ふ違のあらばこそ、戸外の敵は眞の人間、そこ動くなと脇差取つて左の指先に三寸の鯉口、柄に手をかけ戸際に窺ひ寄り、足場はかりて中腰となりつ、眼配りて待てども敵さらに踏み込まず、されど耳傾くればザワ／＼と私語く聲



しけり、三尺無反の電光ズラリと抜いて真向に振り翳し、

「江戸で男を賣つた三日月の次郎が今飛び出す、一人づゝは面倒だ、刃の襖作つて待つて居れ」

流石は比類なき大達もの、名乗りかけて内より戸を蹴破り、躍り出づれば敵の影だもなし、勢ひ抜け力失せて不思議に堪へやらず、幾度となく家の周囲を馳せめぐりて求むれど、いよゝゝ敵はなし、門口に佇み首傾けて暫し考へ、また首を上げて四邊を見れば、人の背よりも高さ薄萱草の露を宿して風に弄ばるゝが、ザワ〜と音して人の私語くに似たるのみか、隈なき月をうけて、をり〜ピカリ〜と光るは宛ら白刃の鋒に異ならず、治郎吉はたと膝を叩き、またカラ〜と高く笑ひしが、思へば二度の失策に腹立たしさの限りなく、蹴破りし戸と引き割さし布子とを恨めしげに睨みながら、脇

差鞘に收めて床の上に膝行り上り、再び建つる戸もなければ月の入るまゝに枕とつて打臥せしが、をり〜何を思ひけむ、獨りクス〜と笑ひけり、

門の戸あけ放ちたるまゝ、秋の夜風吹き入りて燈火消えしも知らず、有明の月さし覗けど雁金ともいはず、高軒蟲の音を驚かして正體なき治郎吉が身を、何時の間にも何處より來にけむ二十三四の女盛り、しかも山里には聞き馴れぬ優しき聲もて、

「三日月どの、三日月どの」

幾たびか呼びかけて揺り起せども答へなし、

「え、埒あかぬ、これは何うしたもの」



郭公ならで見る間に落つる有明の月、後徳大寺の呆れ顔かりて女の姿じろく、

「何しに來た」

花も實もなき治郎吉の詞に、女は腹立たしく膝すり寄せ、

「妾を誰と思つて」

「え、白癡女、世の中に女房忘れる奴があるか」

「さ、その女房が夜晝かけて江戸から尋ねて來たはよくく、それを左様とも思はず、骨折れるほど呼んでも厭ばかり」

「愚癡いふな、用をいへ」

妻は俄に笑ひ出し、

「おほく、いかな事とて相も變らぬ一徹、よう來たと一言ぐらゐ云うても」

あとは流石に口籠りつゝ、勝手知らねど早や百年も住み馴れし思ひ、小褌かゝけていそくと夜具をたゝみ、曲みし破窓の戸を焦躁しげに引き開けつ、すべ箒とつて掃き出さむとするを見て、治郎吉急て手をあげ、

「さて、十日餘りの無性に積つた塵埃が舞ひ上る、え、髪が汚れるわ、それ、この手拭で頭を包め」

鐵壁に頭突うたむず荒男も、をかしや妻の黒髪一筋が大事大切、おのが手拭を取つて投げやりぬ、をりしも對家の老婆は丸瓦に藁火を盛りて入り來りしが、見馴れぬ美婦の馴れくしきを訝りて會釋しながら物いはず、治郎吉かくと見て笑ひながら、

「やア婆公、不意に厄介ものが殖えた、萬事たのむ」

都鄙老若の別ちこそあれ、後は引きとりて女同志の言葉も優しく問



ひつ答への細々と打語りぬ、

五年た、ば復た江戸に出る三日月の影、それまでは必ず使ひすなと言ひ置きし妻が、三年越しに曉かけて此の草叢へは何故と、さすが片心に掛りつ、老婆の去りし後にて妻に問へば、飛鳥山の騒ぎも一たびは治りしもの、斬られし旗本の親類縁者が手を聯ねての讒言に、思うけし白須甲斐が奉行職を剝がれしのみか、猶も事ひづかしうなりしかば、一と云はれし子分の鬼若三次が、その下手人と名乗り出て、三尺高き棘臺に笑うて睡りし始終の物語、さく治郎吉は膝組み直して、

「よし慥に聞いた」

妻は尙も摺り寄つて聲濟ませ、

「そればかりではない、お前が此所に居ること知れて、その旗本

の友達兄弟が十四五人の

キリリと上げし眉根もろとも、

「む、來をツたか」

「きたとも、しかも佐倉の家老に縁もつ者があつて、皆その邸宅に隠れて居るとのこと、子分衆が親方の大事、我もくと騒いだなれど、一徹のお前が言ひ置いたこともあれば、一まづ妾が前へと晝夜をかけて知らせに來た、油断はならぬ、膽ある子分衆二三十人は是非よび下して」

口に任せてツカ〜といひかけしが、日頃より知る良人の氣質、俄に心付いて、その顔色をうかゞひ、

「もし腕づくの外で男を缺く事もあらうかと、晴著の衣裳一重と金子も百兩用意して來たほどに」



治郎吉思はず膝を叩いてニコリと打笑み、

「お、能く氣が付いた、流石むさし一文字の娘、三日月治郎が女房お菊」

譽められて嬉しまぎれにホ、と笑ひ、

「何は儲置き片時も早う子分の衆を」

「いや其れには及ばぬ、しかし小車源次は達者か」

「はい、鬼若さんの跡は源次さんが引取って立派にお前の名代」

「よし、源次が眼球、黒いうちは心配いらぬ」

夫婦が物語る折から村の男一人、狼狽へながら飛び来りしが、治郎吉を招いで耳に口あて、暫し何かを私語さしが、また慌しく走り出でぬ、

治郎吉は妻を見返りて、

「お菊、一文奴が物いひに来るとか、高が知れた宮相撲一疋、捻ッて飛ばすに雑作なけれど其れも罪だ、寝て聞くほどに、あしらうてやれ」

いひつゝ、コロリと横になりて手枕すれば、馴れし臂突の妻は抜目もなく如才もなく、枕屏風もて打圍ひぬ、

程もあらせずドヤ〜と入り来りし五六人、向疵を看板にかけて皆洞金卷の一本おとし、中にも一際目立つ大兵肥満の男が毛脛あらはして聲ふりたて、

「此家の主人に逢はう」

お菊は騒がす襟かき合して、

「妾は留守を預る女房、御用があれば聞いておきませう」

「イヤ女郎では談判が付かぬ、しかし折角来た甲斐に名乗って歸



猿に似たる臀しりハンまくりて腰こしうちかけ、

「耳みみあるからは名を知る筈はず、前髪まへかみ剃そッて本場ほんばの土俵どへうを踏ふンでも、二段目にだんめあらして貧乏神びんぼうがみから幕まくへ飛び込こんだ不動山ふどうさん秀五郎ひでさちろうだ、反そりが十二手ひねり捻ひねりが十二手なひ投なの十二手かけ掛かけの十二手なひ、あはして四十八手よじゅうはちては箸はし取る時ときも備そなはる男おとこ一貫くわん」

お菊は口に手を當あて、牙さえたる聲こゑに一入ひとしほ高く笑わらひ、

「相撲すまづの講釋かうしやくも門かどが違ちがふ、夏なつの上氣のほせが秋あきにななッても、まだ去とれぬ氣きの毒どくさ」

なほも笑わらひの聲こゑを止めず、この頃ころの野邊のべに露つゆ深ふかき女郎花をんなめしを、その儘ままうつす優女やさせんが會釋あしやくもなくボンと打ち込みし言葉ことばの録ろくに、胸貫むねつらぬかれて頓とみには返答へんたふも出いでず手足てあしも出いでず、互たがひに顔見合かみあはして眞黒まぐろき面つらに白しろき

眼めをばちつかすのみ、慾深よくふかき鳩はとが豆鐵砲まめてつぱうに打うたれしを思おもひ出して、お菊はますく腹はらをかへつ堪たへやらず、不動山ふどうさんは怒いかりの顔色かんしよく、あはや片脛かたすねかけむとせしが、なに思おもひけむ俄はかに收とめて、  
「小癩こしかな女郎めづの願ねがひ、ひき割さく筈はずなれど、秀五郎ひでさちろうが女おんなを相手あひてにしたと囃はやされては男おとこがたぬ、後日さあつち來きるととき夫婦ふうふもろとも念佛ねんぶつ忘わするるな」

睨にらみ散ちらして、

「皆來みない」

子分こぶん引き連つれ出でむとせしに、破やぶれし枕屏風まくらびやうぶの物影ものかげより、

「蚊蜻蜒かどんぼ野郎やらう待まちて、主人あなさまが逢あうて呉くれるわ」

聲こゑと等ひとしくぬくと立たッたる三日月みやづき治郎ぢらう、兩腕りやうぶでさし上げて筋骨すぢを揉もみつ、梁らうばりの塵ちりも飛とばむばかりの大欠伸おほあくび、のさくくと二足ふたあし三足さんあし歩あゆみい



で、片膝なげ出せば、お菊は脇差とツて、そと良人の傍らに置きぬ、不動山もさるもの、立歸ツて突き出す膝と膝とは僅一尺生死の界、従ふ子分は庭に並んで四方に眼配れり、治郎吉は兩の掌を敵の鼻頭へ示し、

「見えたか」

不動山も騒がずセ、ラ笑ひ、

「あ、三日月治郎と知ツて來た、江戸でこそ少しは蠢いたにせよ、脱走ツて下總へ來たからは、この不動山に一言の挨拶すべき筈、それもよし、うぬが瘦腕で佐倉の城下へ道場破りに行くと聞いて臍が糾れるわ、上總下總に羽を伸す秀五郎を知らぬか、さ、改めて挨拶しろ、いやなら念佛いへ」

治郎吉は身動さもせず願撫でて、じろく見まはし、

「蟠る龍の鬚を引くとは汝がこと、鷹が飛べば糞蠅も飛びたがる腰抜野郎、口たゝくはよけれど寄るな、觸らば忽ち粉骨碎身、しやツ面洗うて出直せ、出直せ」

いひつゝ空嘯いて傍に人なきが如し、不動山は眼怒らし膝たて直して脇差ひきつけ、

「三日月、起て」

治郎吉からくと笑ひながら、

「やさしい奴、無言で飛び付かば攫み殺さうと思ツたれど、三日月起ての一言に人間の心地した、よし起ツてもやらう、しかし前刻の相撲講釋が小耳に残ツて片腹痛い、土俵は踏まぬ三日月なれど相撲で相手せう」

秀五郎もニコリと笑み、



「その一言聞いた、場所と日は」

「いや汝が勝手次第、三日月の足が、この大井戸村を離れたら何時でも掛れ」

「慥に約束する、忘れて噂えるな三日月」

治郎吉ベロリと舌を出し、

「二枚は無い」

不動山も漸く立ち上りて子分もろとも、

「また逢ふわ」

言葉を残して去る後より、

「お菊、鹽まけ」

良人の聲の下、妻は胴巻の財布探りて一兩小判を十四五枚ばらばらと投げ付けたり、驚いて見返る二人の子分、南無三とばかり不動

山怒りの拳固めて其の横面をした、か打てば、よろしく一二間のめッて撞と倒れ伏す、内には夫婦が高く笑ふ聲、わは、、、おほ、ほ、、、

「いやもう聞いた聞いた、小氣味よう聞いた」

喚きながら背門の薄萱草おし分けて出づる村の男四五人、落ち散る小判を透しつ、ためつ、じろく見まはし、

「踏んでは勿體ない、脛が曲るぞ、勘作氣を付け、頓平跨ぐな」  
浅瀬を渡る五位鷺を其ま、首を縮め、腰を屈め、爪足たて、入り来るを見て治郎吉は笑ひながら、

「村の衆、それを拾うて一杯飲んで呉れ」

「これは又途方もない、この大枚は我等で扱はれぬ、お庄屋さまに相談して村評議にかけ、同じ貰ふなら秋祭りの入費にする、



喃、杵右衛門、去年の報仇、隣村に鼻あかしてやらう」  
一枚々々掌に載せて押し戴きつゝ、拾ひ集むる様いと呵し、  
この日の晝過ぐるころ、武家奉公の仲間三人、一人は文雨携へて先  
に立ち、續いて魚籠に酒樽荷うて入り来りぬ、

「城下へ道場破りに行く御人と聞いて、佐倉の家老職田原大角方  
より使の者、書狀披いて贈物うけて下され」

治郎吉は心に思ひ當ることやありけむ、訝りもせず其の書面を讀め  
ば、「いまだ親しからねど、このごろ城下の噂に聞き及ぶ、武門の老  
職として、斯程の者を見ざるも遺憾なれば、今日七つ時より邸宅へ  
来るべし、初見參に酒酌まむ」との文意なり、治郎吉少しも躊躇  
はず、

「田原の御家來、立ち歸つて傳言たのむ、書面の趣、委細承知、

禮は參上して、ちき／＼申し上げる」

仲間のもの去りぬ、お菊は慌て、良人に摺り寄り、

「なか／＼寸分の油断も出来ぬ、覺悟して居たなれど、かう至急  
とは」

治郎吉は大胡坐に煙草くゆらしながら目を閉ちて、

「心配すな、む、面白くなつて來たわい」

村の茅屋根を吹く嵐、颯と音して、辛くも宿る木の葉一二枚ひらく  
と落ちぬ、日脚漸く傾きて七つ時には間もあらず、

「お菊、今いッたこと忘るゝな」  
いひつゝ、低き軒端を屈んで出づる大男、三年越しに今日こそ飾る晴



衣裳は、月に一度の空に見るばかり他人には許さぬ三日月に、野晒しを染め抜いたる伊達模様、環繋ぎの白博多を拳長に結び、叩かば鞘を離る、脇差の落しやう、兩の手を懐にして少し反身になりつ、裾を蹴つて踏み出す歩みやう、天晴れ勇みの中に色添へて歌舞伎にせまほしき六法むき、見送る妻は何おもひけむ戸口に佇みて涙含めり、治郎吉ふり返りて聲鋭く、

「え、氣をつけ」

矢を放つが如き一言一足の下へ、因果も脆き秋の瘦蛙ビヨコリと飛び出で、踏みひしがれぬ、治郎吉慌て、片足あげつ眉を顰め、手負ながら路傍の草叢へ這ひゆくを哀れげに見やりて、

「怪我だ、怪我だ、許してくれ」

大井戸村より佐倉の城下へは三里の路程、半ば歩んで阪戸も過ぎ

つ、高渡の前なる啜まで來しに、並木の松影より躍り出で、大の字なりに立塞がる男あり、

「待ち草臥れた三日月、眼眩んで見違ふな、不動山秀五郎だ」

治郎吉は懐手のまゝ、睨み付け、

「他の約束に時刻が後れる、邪魔すな、そこ退け」

秀五郎ツカ／＼と歩み寄り、

「今朝の一言忘れたか、但しまた怯れが出てか、所詮叶はぬと諦め付いたら、這ひ蹲つて砂なめれ」

治郎吉空を仰いで大口開きつ高笑ひ、

「さて／＼合點の悪い奴、そこ退けとは汝を助ける情だ、しかし折角の頼み、面倒みて相撲つてやらう」

さしたるまゝ、に脇差を後に廻し、二足三足退いて大手廣げつ、頤



もて、

「さ、来い」

不動山は兼ての覺悟、くるくると衣服ぬぎ捨つれば喰ひ入ッたる縮込に流石は叩き上げし骨格、力足踏んで便々たる腹撫で下し、兩腕を向うさまに地につけ、狗居になつて息を含み睨み上げ、足の親指もてジリリくと土を食みつゝ、進み寄る有様は、長け十丈の鬼をも抱きすくめむといはぬばかり、治郎吉は立ッたるまゝ冷かに見下して笑を含み、

「もの／＼しい其さま、三遍まではッてワンと／＼」

いかで躊躇ふべき不動山は火炎を吐くの勢ひ、エイヤ、オーと立上り、縮込ボンと叩いて疾風の如く突き入ッたり、治郎吉は兩腕さし伸べてムズと引ッ組みしが、敵は何さま此道の手練もの、治郎が左

手を手繰り込むや否や外股に手を掛け高無雙に極めむとせしが、土俵の砂こそ踏まね此方も剛のもの、忽ち腰をあづけて捻らむとすれば敵また振ッて外禰に掛けたり、かけられて流石の治郎も我知らず足もと浮きしに、不動山透さず得たりと突ッ掛け来るを蹴ッて、やツとばかり聲もろとも、相撲にては肩透し柔術に取ッては關流の引落とし、敵の肩先に手をかけ體を捻ッて左へ透かせば、鐵もて鑄たらむやうの不動山秀五郎も、あはれ夜風に木の葉の散る如く、あてどもなき空を掴んで砂蹴り上げつ、一間二間三間あまり、四間も離れし松の根方に地響き打ッて撞と仆れたり、

「約束の相撲勝負は濟んだ、不足はあるまい、さ、是からは外の腕づくだ、汝に尋ねることがある」

いひつゝ、大跨に歩み寄る治郎吉の面魂、不動山は腰骨したゝかに



控きて堪へかぬれど、こゝ一所懸命と跳ね起きて又もや躍り掛るを  
 今度は一瞬の手のうち稻妻の働き、忽ち取つて抑へて動かせず、  
 「ジタバタすな、相撲と事が違ふわ」  
 片膝を敵の背にかけて右の指先を喉輪に探り入れ、一捻り締め上ぐ  
 る柔術の精妙、

「この三日月が氣を知つて物いひかけ、折よくば相撲の手で殺れ  
 と頼んだザブがあらう、名をいへ、白状しろ」

不動山は色青ざめて苦しき息も絶えく、

「知らぬ、三日月、汝も男なら詮議する手間で、この秀五郎を  
 斬れ、腕づくで負けたからは一言いはぬ」

治郎吉は何おもひけむ、忽ち手を放ちてニコリと笑み、

「思つたよりは骨ある奴、また逢ふまで命は預け置く」

言葉を残して後見返らず脇目もやらず、夕日に間近き秋の繩手道、  
 伊達模様の裾さばき面白う、脇差の銅金を輝かして城下の方へ歩み  
 行くさま、稲田に立てる案山子まで天晴れ男といひたげなり、

佐倉の市街へ足踏み入れし頃は黄昏過ぎて早や暮れ果てたり、虎子  
 を求むるにあらねど、我から進んで虎穴に入るは持つて生れし病の  
 一つ、普く浮世を療治する臆病神に憎まれて、こゝに只だ一人洩ら  
 されし不幸もの、城の大手を右に見て武者窓つゞく門前に番人の耳  
 驚かし、

「約束の時刻に後れたれど、大井戸村の道場破りが來たと傳へて  
 くれ」

内には兼て待ち受けしと見え、一人の仲間いで、會釋しながら此方  
 へといふ、治郎吉大手を振つて門内に進み入れば、若き侍二人玄關



の左右に手燭携へて扣ふるは案内者ならむ、

「夜分に邪魔して済まぬ」

飾らぬ武骨の挨拶もろとも厳しき式臺へ音たて、踏み上げれば、一人は前に立ち一人は後より付き添ひぬ、治郎吉は脇差とツて左の手に提げ右を懐にせるまゝ、偃蹇り返つて大道を歩むに等しく、幾室となく打過ぎて奥深く進み入りしが、暫くと聲かけて前後の二人躡きつゝ襖を左右に引き開ければ、點し聯ねたる銀燭さながら白晝の如く、正面に座蒲團重ねて豊に脰を几に凭せ、輝くばかりの刀架に白絲柄の大刀かけて坐せる相貌、あくまで武道に鍛へし四十三四の赤ら面、鬚の毛縮みて額に顯はす筋二本、

「當藩の老職田原大角である、許す、近う寄れ」

治郎吉は脇差さげたるまゝ、づかゝと進み入りて座敷の眞只中に

二王立、大角の面體を見下し見詰めて坐しもせず、

「御領分に身を置く下郎なれど、今日はお招きに因つて、わざわざ

ぞ出掛けた客分、敷物なくては臀が据らぬ」

會釋もなく吐き出したる大言に、大角むツと怒りの色あらはせしが、

又おし静めて苦笑ひ、

「おゝ、是は主人の失念、こりや誰か敷物を」

聲の下より若侍、當時には希代の奢り水色羅紗の重ね蒲團を持ち來りぬ、

「生れつき骨が硬うて、膝折ることの出来ぬ男、御免蒙る」

いひつゝ脇差左に引き付けて投げ胡坐、大角目を圓くしてじろく

見まはし、

「名は何と申す」



「治郎吉といふ」

「む、鎗一本の武士に欲しい立派の骨柄、この城下の有らゆる道場を破りしと聞いて大角益々慕はしい、生れは江戸らしう思ふ、年は幾歳であるぞ」

治郎吉は目を閉ぢて頬の邊りを撫でつゝ、

「身の上ばなしに來ぬはず、お手紙の文面、まづ御馳走に預りた  
ら」

主客の隔たりは疊を横に二枚、一喝叫べば血糊を滾す奇怪の酒宴、大角は盃とり上げて、酌する童になみ／＼注がせながら、

「治郎吉、毒見とか唱へて主人が先づ飲むぞ」

「いや御念の入つたこと」

大角一息に飲み乾して又注がせつゝ、

「氣の毒ではあるが重ねるぞ」

いひつゝ、二度の盃を半ば飲んで臺に置き、片膝たて、笑を含みながら、

「治郎吉、山海の美味は常に飽きて居る、如何である、この大角が貴様に所望する肴、整へてくれまいか」

治郎吉は態と恍惚顔、

「その肴とは」

「いや外でない、貴様の命貰ひたい」

いひつゝ、左の手は早や刀架に近よれり、治郎も油断せず脇差の鍔元を指に抑へつゝ、せゝら笑ひ、

「お易い御用、しかし此の治郎吉は些とお前様の庖丁に掛り悪い、印幡の沼の小鮎鱒が御身分相應」



大角、すつくと立って、

「それ客人、獲物が掛った」

聲と等しく襖蹴放ちて、ずらりと列んだる十四五人の武士、抜き連れたる白刃は、燭に映じて霜夜の篠薄、されど茲に六尺の身を膽魂で作り上げたる治郎吉は、坐したるまゝ、聲荒らげ、

「騒ぐなサンピン、三日月治郎だ」

我物ならねど熨斗目の袖に佐倉十一萬石を包む田原家の裏門通り、堀溝の石縁を傳うて彼方此方を窺ふ男あり、宵の星明りに確乎と見えねど、陽炎の如く走る面かけ音たてず地を踏むはいづれ曲もの、「の字なりの隅塀に身を寄せつ、腰なる脇差を鞘のまゝ、抜いて壁に

凭せかけ、鏝際に片足かかると等しく猿臂を伸ばして屋根の裏桁に縋りつ、身は宙を抛ぐる鞠ひらりと跳ねて塀内に躍り入れば、下緒を解いて口に銜へしものか、主の影もろとも脇差も亦た生けるが如く飛んで入りぬ、

表門には優しき女の聲、

「たのみます、御門の衆たのみます」

武者窓より漏るゝ燈火の光り、人の私語く聲さこえながら答へなし、女は堪へかねて近寄りつ、潜り門うち叩き、

「お召に因つて大井戸村から参つた者の妻、俄の用事に良人を迎ひのため」

拳の痺るゝばかり續けざまに音たつれば、内より人を叱るに馴れし尖り聲、



「無禮もの、女の分際で武家の門叩くは奇ッ怪千萬」

「これは申譯のない、一向式作法を心得ぬ田舎女、何事もお免し蒙ッて良人に一寸」

「黙れ、その町奴は處のお手料理で御馳走にあづかる筈、望みならお件食を願ッてやらう、夫婦もろとも」

聞くより女は一入せき込んで拳に力を入れ、

「分に過ぎた御馳走に酔ひ仆れては濟まぬ、また畏れ多いが殿さまに一言のお禮も申し上げたい」

内には稍しばし音なかりしが、やがて一人歩み寄る氣配、

「待て、今あけて遣はず」

潜り門の開くや否、彼の女つと走せ入りぬ、

裏と表はいざ知らず、こゝ鐵桶とせる奥座敷の眞ッ只中、白刃もて

作る屏風に輝き互る銀燭の下、三日月治郎は脇差の鐙を突き立て、大胡坐のまゝ、不敵にも右の手さし延べて銚子ひき寄せ、

「急くな急くな、秋の夜は長い」

いひつゝグイと飲んで舌うち鳴らす傍若無人、

「この三日月を幡隨院と見て不足あるまい、しかし水野に受取れぬサンピンども」

それといはゞ八方より疊んで浴せかくる亂刀の中に身を置きながら、兔の毛で衝いたユルギもなく、あまりの無頓著に膽挫がれて拍子ぬけたる十餘人、流石の大角も刀ひッさげて立ッたるまゝ、足踏み出さず、敵ながら天晴れ剛と思ふ色を隠して指さしつ、

「お客人、下郎には珍らしい奴で御坐らぬか、なれどモハヤ釜中の魚、袋の鼠、まづ此まゝ置いてゆる／＼見るも一興、好い慰

の魚、袋の鼠、まづ此まゝ置いてゆる／＼見るも一興、好い慰



みで御坐る」

勇を驅ツて大量を糺ひつ、あは、と笑ふ折しも、かねて今宵の事に興かる一人の者、あわて、走せ来りしが、俄に跡退りして顔の色青ざめぬ、大角聲かけて、

「何用か」

「只今、女が、大井戸村のもの、此奴の妻と申し居ります」

「む、いよ、興が乗って面白い、引ッ立て、来い」

吉か凶か治郎吉の鐵腸にヒシと應へ、思はず眉を昂げて眼を見張る程もあらせず、物凄き此の場に時ならず咲きし一輪の花、

「これはお立派なこと、妾は三日月の妻、良人の骨を拾ひに」

聲も終らず、あはれ室を隔て、聞ゆる物音、叫び呼ぶ聲、大角訝りて、きツと目配せすれば、太刀風ビユと音して殺氣に閃く十五本

の白刃、おのゝ真ッ向に振り翳して取り巻き詰め寄るを、遅しと待ち受けたる治郎は片膝たて、左は脇差の鏢もと、右の指を疊の合せ目に差し込み、あはや跳ね返して横殴りに斬り込まむ勢ひ、妻は後に燭臺の根もと握ッて斜めに窺ふ凄じさ、髪のに鐵千斤を繋ぐ掛引、こゝ一轉瞬一呼吸の其とき、

「人質捕ツた、待てッ」

叫ぶ聲と等しく飛鳥の如く駈け来る一個の男、身輕き旅装に山形脚絆キリ草鞋のまゝ、追ひ縋る男女を後ざまに蹴仆しつ、三歳ばかりの小兒を小脇に引ッ抱へて立ッたる様は、色白の小兵ながら二十八九の唯ならぬ面貌、

「揃ひも揃ツた木偶のぼう、見ン事その白刃おろして見ろ、三日月の腕といはれた小車源次だ」



用捨もなく小兒の喉輪に手を掛けむとするに、大角あわて、我知らず手を上げ足を爪立て

「ま、ま、待て、こりや待ってくれ」

「お、待ってやらう、しかし此場の始末は何うする」

あはれや最愛の兒を捕られて己が氣脈まで縛り上げられし大角、ますます急ぎ込み、

「いや、かたぐ、兎も角も刃を收めて、な、な、なに、大角別に存じ寄りが御坐る、え、な、なに兎も角」

あまりの見苦しき怖れさま、氣の毒にも腹立たしく所詮甲斐なしと思ひけむ、一人行き二人去りて十五人の姿いつの間にか影もなし、源次の飛び込みしより治郎吉は一言も出さず、また銚子引き寄せて残りの酒をクビリ〜と飲みながら、

「源次、罪な事するな、その餓鬼戻してやれ、折角の張合ぬけてとんと興さめた」

いひつゝ立って小兒を我手に抱き取り、

「お菊、われも一疋生んで呉れ、お、泣くな、泣くな」

怖しさを打忘れて次の室に騒ぐ女どもを顧み、

「女中衆、そら戻す、慥に怪我はないぞ」

小兒を其方に向けて蜘蛛を追ふ如く疊を叩けば、無心にも虎口を脱れしといひたげに這ひ行きぬ、大角は呆れて立ッたるまゝの木像、言句も出でず、治郎吉笑うて二三歩進み寄りつ、息吹きかけ、

「やい大角、汝が奸計と此の源次が忍び込んだを差引いて不足あるまい、但しあるか、あれば腕糾ッて今こゝで聞く」

大角あわて、額の汗を拭ひ、



「ふ、ふ、不足はない、許す、早く歸れ」

「いや許すとは何事だ、五分と五分との掛引に願が過ぎるは」

二たび三たび急所を衝かれて返す言葉もなく、ジリリ〜と後に退きて此も亦つひに影を隠しぬ、治郎は源次と妻とに目配せしながら、脇差の柄を叩いて聲張り上げ、

「三日月治郎が、お立ちだ、見送りしろ、案内しろ」

源次も續いて草鞋のまゝの足踏み鳴らし、

「怯氣の付いた溝鼠、出損ッたら首だけッン出して、大違もの、歸りを拜み奉れ」

勇士が戰場を引揚ぐるに等しく暗きに暗く自負廣言、治郎吉は燭臺とツて眞ッ先に立ちつゝ、襖障子の分ちなく當るに任せ脛を上げて蹴返し蹴破り、お菊はその次、源次は殿り承ると云はぬばかり、

ずらりと抜いたる白刃提げて眼配りつ、

「二本棒出ろ、今お歸りだ」

喚いて玄關に至るまで敵一人の影も認めず、狼狽へて逃げ惑ひたる仲間到大門あけさせ、三人うち揃うて悠々と去りぬ、

「源次いつ来た、今夜の働さは上出来、上出来」

治郎吉が響むる言葉に源次の答へも待たず、お菊は流石にホツと息をつきつゝ、良人の袖を引き、

「妾が一人心配最中、思ひ掛けない源次さんが見えて、幸ひ斯うした手筈に」

治郎は振り返へりて少し聲尖らせ、

「あれ程いつて置いたに、白癡女、怪我して取返しがるか」  
蹴られて滾す笑渦の露、



此の頃の月いづるにはなかく、待たで星明りを頼りに歸るこそよ  
けれど、三人互に語りつ、城下を離れて一里ばかり、一本燉にかゝ  
りし向にチラつく提灯の火三つ四つ、眼定めて見れば朧に讀む御用  
の二字、幽に響く多人數の跽音、  
「失策ツた、油断すな源次、かけられた」  
急にまた語をつぎ、

「お菊、面倒だ、隠れろ」

尋ねもの觸書

異名三日月事

江戸生れ當時領内大井戸村住

治郎吉

三十七八位

右治郎吉妻

近來江戸より來りし者のよし

二十五六位

異名小車事

同

源次

二十八九位

右之者共儀當九月廿九日夜、家老職田原大角屋敷へ忍び込み、土  
藏を切り破り金子衣類を盗み去らむとせし處、番人の者に見付け  
られ、折柄主人の不在、家來の手少きに乘じ亂暴狼藉を働き候而  
已ならず、召捕の爲め向ひし役人に手向ひ致し七人まで殺傷のま  
ま逃亡致し候段、嚴科之罪人、重々不届至極に付き見當り次第訴  
人致し候者へは相當の褒美可遣候、萬一他家御領分内にて見付け  
候節は其處の町役人村役人庄屋等へ内々届出の上、早速引返して



當藩へ訴人可致者也

享保八年十月一日

佐倉藩

人相書

次郎吉

色淺黒く、眉毛濃く、目大、鼻高く、頭は拔き上げの大額、骨太にして身丈六尺餘りもあるべく、兩の掌に三日月なりの疵痕あり、

源 次

源 次

色白にして中肉中脊、人並勝れて美形なり、色白、眉毛濃くして長く、目並、鼻高く、瘦形にて並男より小兵の様なり、左右いづれか慥ならざれど、額の中央より眉毛を割り、皆に掛けて斜に一文字の刀痕鮮明なり、

師走の空に吹く風は餘波惜し氣にビユと泣く、笑ふは紅葉手あげて來む年を待つ小兒のみ、江戸の町々は歳暮の用意に浮世のけしき添へ、道行く人の足端も何となう刻むが如き其の下町の忙しきに似もやらず、こゝは静けく並ぶ屋敷町、土手三番町の角引廻して市ヶ谷見附を望む一構へは、白た、き中黒の一本道具、以前の町奉行白須が住居とは門の屋根瓦に九曜の紋どころ疑ひなし、主人の甲斐は腹黒き人のため職剝がれしより、争ひもせず機を見て退く智者の鑿み、病に假託けて嗣子に世を譲りつ、今は名さへ寛齋と呼んで詩歌俳諧の風流三昧、今朝も黎明より起きいで、獨り書齋の窓に微笑み、前夕より降り積りし雪景色に寒さ忘れて歎稱措かず、



急に手を拍つて侍者を呼び、

「雨具と傘を持って、なに、いや／＼氣儘に雪見がしたい、供はいらぬぞ」

黒丹後の長合羽に柄袋かけたる細身の大小、遊蛇の目の傘を携へて、書齋より庭傳ひに門前へ出でし白須寛齋、肩衣を脱いで茲に三年を歴れど、何となく残る昔の面影、五十三四の半白を筈長き弓形に元結かけて、誰が目にも優に凛々しき槍馬の老武士、爪皮の下駄齒に雪を食ませつゝ、低吟しながら我屋敷を離れて半町あまり行く向より、竹の皮笠に赤合羽の武家下郎一人、素足のまゝの草鞋に雪玉を跳ねて急ぎ来しが、顔も上げず小腰を屈めて道を譲り過ぎむとする様、優しき者と見る寛齋は振り返りて笑ひながら、

「其方達には雪が仇敵であるの、しかし酒といふ味方もある」

慰むる聲さくより彼の下郎は近よりて片手を雪につき、

「御前、恐ながら白須の御前では」

「む、予は甲斐である、其方は何者か」

下郎は俄に笠を取つて聲沈ませ、

「治郎吉奴で御坐います」

「お、治郎か、久しい、が、その風體は如何致した」

「いや、これは申し上ぐる迄もない事、實は唯お暇乞にと存じて圖らず途中で」

いと顔つく／＼と見る寛齋は心の中に思ふことやありけむ、四邊みまよして、

「邸宅へ来す」

廣き庭園の奥深く雪もつ竹に圍まれし數寄屋のうち、寛齋は爐に残



る今朝の火に炭を添へながら、

「こゝへは誰も来ぬやう申し付け置いた、うち寛いで宜い、さ、  
こちへ〜」

治郎吉は赤合羽を踏石の傍へ脱ぎ捨て、雪を掴んで足を磨り洗ひつ  
膝行り上り、脇差を壁の片隅に推しやりて雙手をつき、

「舅一文字より引き續いての御恩、わけて此の治郎奴が爲めに大  
切の御役目にまで」

いはむとすれば、寛齋急に手をあげて、

「いや〜、予が若輩の砌り一文字には言葉に盡せぬ大恩ある、  
また其方が事で役目などとは以ての外、全く劇職に堪へ兼ね  
て此方から願ツた譯、其れは兎も角、暇乞ひに參ツたとは如何  
な次第であるか」

治郎吉は思はず膝進ませつ、懐中より一枚の書ものを取り出して寛  
齋の前に置き、

「この治郎が命の捨て時と心得ます」

いひつゝ片手は疊につけて片手は膝の上、眉を上げ眼を張りて主人  
の顔色を窺ひ、

「事にも寄れ、己が悪事を包んで、この治郎を盗賊呼ばはり、剩

へ下總一圓の津々山里までもその張紙、うぬ、死際の晴れ業、

見事腕一本で佐倉十一萬石を買ひ取る考へに御坐います、なれ

どまた、萬一御前に御迷惑かゝらうかと是れのみ、何卒御意の

ほどを〜

流石の寛齋も暫し言葉なく、たゞ僅に洩らすは、

「奇ツ怪至極な奴ども、其方が氣質で、むゝ、察しやる」



なほも其の觸書を見詰めて考へ沈みしが、

「この事は始めよりの行き掛り、予も胸に据ゑかぬる、治郎吉、其方が命を手に使はして呉れまいか、悪しうは使はぬ」

治郎はニコリと笑みて、

「御前、さし上げます、生憎熨斗の不用意、御免蒙ッて此まゝ」

「お、本懐に存ずる」

をりしも笹葉に積る雪おちてバサリと音しぬ、

「治郎吉、達人が首斬る太刀音に似て居るぞ」

「潔く存じます」

年たち返る正月二十二日の夕暮、當時の大老職酒井若狭守より白須

寛齋へ宛てし一封の招状、また例の歌にや詩にや、但しは過ぐる日に敗れし棋の仇討か、帝鑑の間に裳を垂れて政務の樞機を預り、殿中の長廊下に三家三卿を譲らす権家なれど、風流の交りに冠席なく、職に居らねば槐門を潜るの謗りを受けず、たゞ日頃の如く兩若黨のみを随へ、程も遠からぬ牛込の酒井邸へ足を運びぬ、

天下の大老と旗本の隠居、公けには同席もならざれど、私交の心易げに主人が平常の室、とはいへ華美を盡せし局の一間に相對うて、銀燭を剪らせつゝ歌集を繙き互に評し合ひしが、若狭守は俄に物思ひせし如く小姓の者を遠ざけ、自ら起つて螺鈿厨子より取り出せし一封を寛齋の前に置き、

「今日殿中にて佐倉城主より内願との書面、取敢ず受けて披き見れば、彼が國家老へ忍び入り且つ召捕の者を殺害せし盜賊は、



足下の邸に潛み居るよし、就いては無事に引き渡すやう申し付け呉れと、さ、斯様な文言、あまり埒なさ、よもやとは存ずれど一應」

寛齋は片頬に笑みを寄せて、その書を手にだに觸れず、

「これは、些細の儀に御意を煩はして恐縮仕る、如何にもその盜賊どもは、この寛齋が邸宅に」

若狹守は暫し顔を打守りて眉を擡め、

「それは又、何故」

「明智の御大老、申し上ぐる迄もなく御賢察あらむが、全體、隠居の身分にも致せ天下の直參が、かゝる大罪人を隠匿ふ上は、封書にて内願申し上ぐるに及ばず、立派に届け出で、御詮の手續に従ひ掛け合ふべき筈、それを私事に頼み上ぐる様なる致

方は佐倉殿の誤り、いや、御先方に、何か故障がある故と心得ます」

若狹守は稍膝を動かして、

「成程、む、足下の事に如才あるまい、して、その盜賊を隠匿ひし仔細は」

「いや盜賊と申すも佐倉殿の御勝手、全く以て悪人にあらず、恐れながら寛齋が奉行職を汚せしころ、町奴治郎吉なるものが旗本十七人を飛鳥山に斬りしが事の起り、元來、身分をも顧みず白晝に亂酔して町家の娘子供に無體を働き、其を見兼ねて物言ひし町奴の刃に掛つて、槍馬の武士が十七人まで斃れしは以て外の不覺、恥辱、不用意、表面立て、は直參の面々、家にも係はらむと氣の毒に存じ、その町奴に五年の遠慮を申し付けたが



却ッて我が愚鈍、流石に公けの争ひこそ起さねど、残りし親類縁者が、この寛齋に恨みを重ね、遂には

「左様々々、明奉行の聞えありし足下が俄の不首尾を訝しう存じた、この若狭が其頃そのころに今の身分ならば」

「こは有難き仰せ、なれど、職を剝がれしは全く此身の不肖、また我が落職のあと、即ち唯今の奉行が鑒識にて治郎吉の穿鑿はげしきゆゑ鬼若三次といへる者が下手人と名乗り出で、磔刑、いやはや、其は免も角、申さば下手人は既に無き道理、然るに近ごろ治郎吉が佐倉殿の御領分に身を置くこと、彼の斬られし人々の兄弟朋友が聞き付けて跡を追ひ、卑怯にも詐欺を以て家老田原が邸へ引き寄せ、既に危き處を治郎吉の弟分源次なる者に妨げられたるを、奸智の大角早くも二度の計をめぐらし、

己が權威に盜賊として公然の召捕を差向けしにより、絶體絶命、已むなく七人を斬り捨て、遁れし次第、また其者どもを寛齋が隠匿ひ置くは、恐れながら天下への御奉公と存じて」

「む、委細明瞭致した、が、天下への御奉公とは」

「されば、この治郎吉は異名三日月といへる俠客、下々では達者とも臂突とも申すもの、生れつき世の中に懼るゝ事を存せず、子分と唱へて異體同心の命知らずが、え、殆ど五六百もあらむか、その子分にも又た子分、申さば陪臣陪々臣といふ有様、事の善惡に拘はらず、治郎吉が指さす所は水火の中も物の數と心得ず、肉を刻み骨を削り膽に焼金あつるもニコリと笑うて聲立てぬが此奴等の本性、もし此度の一條を、その子分共が聞き付けなば、よし聞くに致せ治郎吉を手放さぬうちは容易なれど、



一旦彼が憤怒の餘り躍りいで、子分の者に佐倉殿と指させば忽ち一珍事、そのみならず、江戸八百八町の火消人足、即ち齋の者といふは皆彼れの息かゝりし者なれば、スリ半鐘に四十八組の輩が騒ぎ立つるさへ小事ならずと心得ます、就いては此一件は始めより寛齋が行き掛り、成るべくは無事にと存じ、わざと隠匿ひ置く次第」

身動きもせず聲も立てず、要を摘んで静に説き出したる白須寛齋、若狭守は興ありげに聞き居たりしが、また俄に眉宇を曇らせ、

「この太平の世に、しかも下々に左様な者あつては、む、捨て置けぬ」

「いや、御心配に及ばず、治郎吉が命は、この寛齋が自由に使ふ約束が」

「約束とて他人の心、他人の生命を随意には」

「なに、一諾を重んじて身を殺すも悔いぬは彼等が慣ひ」

若狭守は膝を打って三歎し

「噫あるべき武門に魂なく、無くて宜き町人に、その骨、世はむづかしうなッて來た」

寛齋は始めて膝を進ませ、

「次第に因れば一人の治郎吉を殺してなりとも、しかし、茲に一つの心掛りと申すは、去る十八日の夜、源次といへる者が邸宅を脱走せし一條、この者は至ッて激烈の性にて、いはゞ炎の中に小車の轉廻するが如きものと聞けば、もし如何様の事を仕出さむかと」

「さればな、大體かゝる事は至急の所置が肝要、若狭は明日殿中



にて一方を論ず、足下は今夜の中に治郎吉とやらに腹切らす工夫を、嗚呼、聞けば聞くほど俠骨芳ばしき奴、惜しむに餘りあれど、致方ない」

夜いたく更けて星の影暗く、雨氣を含んで土手の松が枝を鳴らす風凄く、人影に吠ゆる犬の聲さへ聞えずなりぬ、をりしも牛込の方より堀端傳ひに見ゆる提灯の光り、水に映じて上下二つの團火伴うて歩むが如く、やゝ市ヶ谷見付に近づかむとする時、あはれ提灯おちてバツと燃ゆるに閃く稻妻、何者ツと叫ぶ一聲、エイ、オーと掛くる切聲、續いてバタ／＼と走る數人の蹶音、傳通院の初夜つく鐘も遠音に響きて一入の慘を添へぬ、

土手三番町の白須が邸へ宙を飛んで駈け戻つたる若黨一人、潛り門を叩く間もあらばこそ、叫びながら突き入りて、

「曲者、御隠居の大事、市ヶ谷の堀端、危い」

聲さゝ付けて俄に騒ぐ家内の者より、長家の戸口蹴放ちて躍り出でたる大の男、脇差ヒツさげて玄關前を斜めに走りざま、

「御家來衆、續いた續いた」

呼ぶ聲はあとに残りながら、ぬしの身は早や門外に跳ね出でたり、

噫、這ひ蹲ツて百萬遍の辭儀すればとて頸骨の曲らむ例なく、蹴られても踏まれても脊に帆を掛け向脛に馬の字書いて遁げ出す世に、不思議や大切の命を粗末に扱ふ男一貫、持て餘して賣らむ／＼と叫べども三十八の今まで買手なく、たま／＼の善き客のがさじと思ひしも水の泡、さりとて今更ら野末の犬の腹肥さむも可惜もの、倍こ



を始めて悟ッたり生は易し死は難しと、否、死は易く生は難しといふこそ人の常なるに、あはれ浮世の不具男、氣の張り弓に心の矢竹を彎かむ由なく、繩も鐵鎖もなければ我から責めて恩人の門長屋に繋がる、三日月治郎吉、燈火の影に腕を組んで思案に苦しむ折から戸口を叩いて若黨の聲、

「至急に御前が召す、至急々々」

治郎吉はツと身を起して帶しめ直し、無腰のまゝ草履うがちて侍部屋より案内にひかれ、奥まりたる一室の闕に踵を重ねて身を圓めつ、あはれや丸行燈の光り眩げに頭を垂れ、

「恐れながら御心中を察し上げます」

「あゝ、心外には存ずれど、何事も命である、治郎吉、離れて居ては語るに不便、近う〜」

手を取らむばかりに優しくいふは今の白須が主人、年の頃は三十に二つ三つも足らざらむか、どこやらに残る父寛齋が威嚴の面影、治郎吉は、やう〜膝行り寄りて猶も頭を擡げ得ず、

「一昨夜の凶變も、基を糺せば皆この治郎吉が故、御家來の注進を聞くや否、宙を飛んで馳け付けたれど、さ、さ、殘念にも、あゝ、

御最後の場を去らず腹搔き切らむと脇差抜きしものゝ、いや〜、一度ならず二度ならず、果ては斯る大罪を脊負ひし身、

我手で死んでは相濟まぬ道理と、そ、そ、其まゝスゴ〜立歸ッてお長屋で夜一夜血の涙、何とかお言葉の下るまでと、昨日の御

葬式にも態と御遠慮申して餘處に見る、せ、せ、切なさ」

鬼をも手捕にせむず大の荒男がポロリと落す一雫、其を拭ひも得せず潜むる聲に力を込め、



「ほ、ほ、骨が砕くるより辛う存じます」  
又もや暫し言葉を止めて兩の掌をビタリと疊につけ、

「若様、御前、申し上げる面目も御坐いませんが、なに、とぞ、この治郎吉奴に親殿様の仇を討てと、いや、たゞ、死ねとの御免しを蒙りたう存じます、ね、ね、願ひ上げます」

あはれや鐵腸を絞らし涙はらくと落すを、さきの程より黙然と聞き居たる主人も聲を曇らせ、

「其方が今の一言、満足に存ずる、父が仇は必ず其れと予も悟つて居る、俱に天を戴かぬ古語、草を分け土を發きて討ちたけれど、こりや、今日大老酒井殿より細々と懇切の内命もあれば暫く胸を抑ふるわ、勿論、公然その筋の穿鑿に油断なく、遠からぬうち召捕るは疑ひない、よし大老が事を分けての内命も願ひ

ず、予が一人にて仇討するはまだしも、此の事を其方に任す譯には行かぬ、な、分つたか」

諭すが如く慰むるが如く頭を傾けて差俯ける治郎吉が横顔を透しながめ、

「治郎吉、しかし其方に一つの頼みある、明日、いや晝は憚りある、夜分に大老の邸宅へ往つて呉れ」

この言葉を聞くや、始めて頭を上げ、  
「お言葉を返して恐れ入りますが、御大老のお邸宅へ、この治郎吉が、如何の御用で」

「いや、何事か存せぬが、父より大老へ其方の事を物語りあるよし、即ち最後はその歸途であつたわ、就いて大老より一度其方を見たいとの事、往けば委細が分る、予が手紙を遣はすか



「ら其れを持參して、明晩暮方より」

いひつゝ、九曜の定紋ちらせる七首を取り出し、

「これは父が祕藏の藤四郎吉光、焼刃の鹽梅、匂ひの工合、名作である、きれるぞ、さ、其方に遣はす、いづくへ行くにも身を離すな、宜いか」

治郎吉は何思ひけむ、つゝと進み寄りて七首を受取り、幾たびか推し戴き、

「先殿様に差し上げし治郎吉が命、御前、もはや何事も申し上げません、有難う存じます」

「むゝ、長屋へ下ッて今夜はゆる〜寝るが宜い」

四つ半の時計を聞いて長屋に立歸ッたる治郎吉、行燈の小影に胡坐組みしまゝ、むゝとばかりに考へ沈みしが、靜に頭を擡げて左に

七首を取り、右の手さしのべて燈火を搔きたて、手拭を口に嚙んで一膝ゆすり寄り、おし戴いて抜き放ちたる刃は九寸の吉光、水氣を含んで尖鋒よりポトリと露の滴らむばかり、其を打かへして透しつ、ためつ瞳を凝らす様は、凄じくも分厘の隙間なく、山崩るゝも動せぬ相貌、

「天晴れ業物」

獨り言ちつゝ、鞆に收めて傍らに置き、またもや腕を組んで心を潛むる折しも、武者窓を漏るゝ春の夜風ふき入りて、鬢の毛亂れ頬の邊りに散り纏ふを、指先に巻き付けて腹立たしげに引き抜き、一息吹きかけて宙に飛ばせば舞ひ上ッて落つる燈火の上、ジリ〜と焼け失せるを何と思ひけむ瞬きもせず見詰めて舌うち鳴らし、

「えゝッ」



さらぬだに淋しき屋敷町の夜更けて聞ゆるは、火の用心を警むる諸家の聲々、はや九つを報ずる拍子木の音、細く断えくゝに唄ふ流しの豊後節、うれしき身には浮世の真味こゝにあれど、物思ふ心には人間の感慨いと深く、臙に天井へうつる行燈の輪形、壁に描く己が影さへ澄み互る真夜中ごろ、治郎吉は猶ほ寝ねもやらず、身を柱に凭せかけて眺むる武者窓の外に、燈火の光りを受けて見ゆる人間の首一つ、訝りながら眼を定めてきつと睨みつけ、

「何者」

その首は動くと共に聲を潜めて、

「げ、源次で、小車の」

治郎吉は暫し物をも言はざりしが、やがて起ち上つて、

「え、何と思つて、ど、どの面さげて舞ひ戻つた」

なほも見詰めて言葉をつぎ、

「いま開けてやるわ、表御門へまはれツ」

門内に引き入れて長屋に連れ來り、行燈を中央に隔てゝ治郎吉は聲鋭く、

「源次」

一聲の息の下じろゝ其の姿を見まはせば、顔の色青ざめて眼中に血筋を引き、旅装束の裾に白みわたる砂塵りは、遠路を走つたるまゝにや息づかひさへ荒く、をりゝ懐に手を差し入れて額を皺めつ、右の鬢先に梨地の如き磨り傷、脚絆の上より左の脛に布を巻きたる様は尋常とも見えす、

「源次、痛みを負つたな」

聲かけながら膝を進め、



「あれ程いつたに、なせ脱けた、しかし、今は詮ない、が、ど、何處へ往つた、言へッ」

問はれて源次は膝行り寄りつゝ、

「こ、こ、この様で舞ひ戻つたも、義兄、餘處で死に度くない一心、遣り損つた謝罪を兼ねて此處へ眠りに歸つた、脛は兎も角、こ、こ、この左の横ッ腹に突き傷、佐倉から十三里の路程を、半分は追ッ立て籠に揺られ半分は懸命で駈け付け、こ、こ、徹へた、こたへたッ」

張り詰めし氣力ゆるんで俄に苦痛を覚えしにや、這ひ寄つて治郎吉が手を持ち添へ、己が横腹に探り入れて、

「こ、これだ、所詮、助からない」

幾重にも巻き付けたる布を徹して水飴の如く血糊の濕み出でたるに

流石の治郎も駭き顔、

「源次、しつかりしろ、よく戻つた、男だ、佐倉で何うした、敵

手は誰、彼奴か」

稍せき込んで聲に勵みを添へ、事の仔細を問はむ違も心掛り、庭に飛び下りて柄杓おツ取り瓶の水掬はむとする其の隙を覗ひ、源次は早くも襟くつろげて吉光の七首を抜き放つや否、逆手の電光、巻き付けたる布の上より背骨へ徹れとばかり、秋茄子を噛むが如くプツリと音たて、突き込んだるはづみ、む、んと叫ぶ一聲に、治郎は振り返つて躍り上りつ、右の脛をあげ、あはや後に仆れむとする源次の肩に確乎と踏み掛け、身を屈めて聲も急しく續け呼び、

「反るな源次、反るな源次、反るなッ」

叫びつゝ、背後の兩脇より雙手を差し込み雙膝に體を挟み、左の腕首



を固く握らせ右の手にて七首の柄握る拳を抑へ、

「早まつた源次、眼を閉ぢるな、一心に行燈の火を睨め、睨んで

何か言へ、聞くぞ源次、火を見失ふな、物いへ」

源次は抱かれながら大息ふいて聲ふるはせ、

「な、な、なに、いふ事ない、途中で、か、か、書いた、ものが、

た、袂に、見て呉れッ」

聞くや否、治郎吉は耳に口あて、

「慥に聞いた」

いひ終つて行燈の火に満身の息ふきかくなれば、燈火きえて忽ち黒闇

闇の其中に喰ひ緊る齒の根を推して漏るゝ治郎が涙聲、

「南無、南無阿」

持ち添へて柄をまはすにや、はッ〜と吐く源次が一期の苦痛、腥

き風に散る門前の白梅一輪、誰が手にか拾はれむ、

今朝より降りいでし猫毛の春雨、蝶の翼を濡らして花の香を誰が家  
におくる、住居は待乳山の片邊り山谷堀の岸根、隅田の流れに竹屋  
の渡船よぶ聲は更なり、金龍山の鐘の音さへ色添へて聞ゆるは場所  
柄、みやこ鳥に事とはむより江戸の意氣地を尋ね來よ、火の粉の中  
で物語らむず四十八組の頭取役、七十一の白髪を頂けど昔しの腕に  
糾は戻らず、むさし一文字が形見の伯父、山谷の國五郎とて皺腹た  
たきつ物いふ阿爺あり、

晝過ぐれど雨は猶ほ歇まず、家内には主人の阿爺が轉寢の枕おしや  
り、我手を後に廻して腰の邊りを叩きながら、



「あ、春雨に誘はれてウト〜と遣ッて退けた心持は、なか〜、千雨々々」

獨り言の聲さ、付けて待ち兼ねしといはむばかり、忙しげに隔ての襖ひさあけて、

「伯父さん、お目が覺めて、お、晝飯の用意も整うてある、そして足の利く駕を一挺」

なかば言はず、阿爺は俄に笑ひ出し、

「あは、お菊ぼう、老人を其様せき立て、呉れるな、三歳兒を預けたと譯が違うて立派な六尺の男、しかも、男の中の男が存分あつてのこと、まして先様は外ならぬ白須の御前、それのみか源次も一所に居れば心配いらぬわ、とはいへ、女房の心に取ッては、いや察して居る」

お菊は焦躁しげに膝すゝめて聲に力を入れ、

「察して呉れるばかりでは氣が濟まぬ、とんと埒あかぬ、前夜も前夜、今朝も今朝、泣き付いてアレほど頼んだに、いッそ、花川戸へ一走りして誰か子分の衆へ」

「え、野郎どもに知らせて堪るものか、それなくてさへ、毎日の様に、この老爺を攻めつけに来る最中だわ」

お菊は此處ぞと思ふ色みえて、

「其れでは今直ぐに是れから」

「あ、幼少ときから親の一字より、この伯父を慕うた丈けに、今となッては無理ばかり並べて困らせをる、可愛い奴だ、が、お菊ぼう、まだ小兒と思ひの外、おれを盲目にして頻りに治郎を譽めたてたのは、む、たしか十七の春から、その時の事を



覺えて居るか、三日月は強くて男が立派だ、人の談話に聞いた  
深見十左を見る様など」

「え、また老人の癖に、その様なことを、今の妾が心は其處どこ  
ろか、夜晝うち通しての心配」

言葉をさき體をそむけて、ピンと拗ねて見すれど、心に問へば思は  
ず散る顔の紅葉、浮世馴れたる色のとどめは二八に増りて見どころ  
多し、

阿爺は最愛の姪に強請まれて、否、實は今朝チラと耳にせし寛齋の  
横死に、治郎が身の上を氣遣ふ折柄なれば、年こそよれ昔の名残一  
本おとし、羽織は疊んで左の肩に打掛け、裾を斜に膝げて裏金嚴し  
う反をうたせし雪駄ばき、

「お菊ぼら、皆の奴等、往ッてくる、いや〜、駕は途中で乗る

わ

いひつゝ、若き者四五人とお菊に送られ、門口に出でむとする折しも、  
何處よりの客にや、二枚だての町駕一挺ドカリと卸すや否、垂簾を  
推し上げて、

「伯父御」

聲かけて、ぬツと顯れたるは三日月治郎、目早く見て取るお菊が聲、

「伯父さん、あれ、お〜」

母屋と離れて庭園の中に建てたる一座敷、内には主人の阿爺と治郎  
が膝つき合しての密談も半ば過ぎ、

「伯父御、今言ッた通りの事情、どの道から足を付けても、所詮  
二度とは世に出られぬ身、いや素より其の覺悟、就いて死後の  
事は萬事たのむ、わけて、お菊は女房ながら此の治郎が爲めに



は大切な奴、猶ほ此上とも面倒を」  
 阿爺は目を閉ぢて幾たびか打うなづき、

「よし頼まれた、心配すな、お菊ぼうは言ふまでもない、花川戸の野郎ども其他の子分が事も慥に承知した、それにつけても憫然な奴は源次、重ね々悪むべきは佐倉のサンピン、よし、治郎、何事も心に掛けず立派に思ひ切つて遣つてくれ、萬々一、今日のお召が無理卑怯な計略で、その毒手に掛つたと聞かば、天下の大老でも佐倉でも、な、な、なんだ、年こそ老れ山谷の阿爺、八百八町のスリ半鐘を鳴らして火の粉の雨を降らし、屋敷もろとも焼き立て、蟲一疋も免すものか、治郎、しつかり遣れ、死後は引き受けた」

老いても逸物さかぬ阿爺、治郎は思はず片頬に笑みを含んで、

「いや、決して其の手数に及ばぬ、たとへ如何なるとも治郎が最期には指一本もさゝせぬ覺悟、また、今の御大老は白須の先殿様とは別して御入魂の間柄、就いては男の潰れる事もあるまい、伯父御、治郎が身は安心して、たゞ、死後を頼む、いや斯ういふうち時刻が後れる」

いひつゝ起たむとすれば阿爺は俄に袖を引きとめ、

「治郎、そ、そ、其れで済むか、お菊ぼうにも餘處ながら名残り惜しんでやれ」

無理に引き据ゑて己は庭園づたひに母屋の方、

「お菊ぼう、お菊ぼう」

呼ぶ聲に如何で後るべき、待ち侘びて障子引あけ縁端より走り出で、  
 「伯父さん、妾まで遠ざけて置いて全體何の談話が」



阿爺は言葉せはしう手を上げて後を指さし、

「え、文句た、かず早う行け、また愚癡こぼして叱られるな」

雨やみて日は未だ暮れねども、金龍山の七つ半を報ずる鐘の音近く、待乳の森に啼く鳥の聲を後に聴きなし、廣徳寺門前を二枚だて先綱かけて矢聲激しく走る一挺の町駕、半町あまりも隔て、その町駕を失はじと見えつ隠れつ追ひ行く十七八人の撥鬘奴、をりしも横町より國司か譜代か何れの大名にや行列美々しう出で来るに、駕人足は駭きて其まゝタジ〜と十間あまり引き返しつ、路傍の軒下に寄せかけたり、行列は此方の道筋へ向はねど、先手の徒士四五人ばらばらと駆け來つて下總なまりの聲鋭く、

「何者か、見れば町駕、無禮な奴、乗人を引き摺り出せ」

駕の中より相摸麻の重ね草履を穿ちしまゝの片足なげ出し、音太く

響く聲にて慌てもせず、

「いづれの御大名かは知らねど、お通り筋を遮つたでなく、また横ぎりしたといふでなく、此處まで引き下つて畏れ入るに何の咎め、草深いお國許とは事が違ふ、薨の波をうつ大江戸で御坐る」

半町あまり後の方に此有様を見し十七八人の者、

「なんだ〜、道具を見ろ、紋所は何藩だ」

聲に應じて一人のもの、

「黒羅紗の三本道具丸に並び鷹の羽、印は菱に十文字、さ、さ、

佐倉だ」

聞くや否、中にも勝れて大の撥鬘奴をどり上つて脇差たゝき、

「佐倉だ、天の興へ、それ行列をぶツ潰せ」



「駕に怪我さすな、敵手に中を見せるな」

「やツつける、佐倉と聞いて堪忍袋が破れた」

互に叫び勵まし罵り合ひ、斯る事には馴れたる命賣りの奴ども、

「目潰しやれ」

といひざま砂を掴んで身は宙を躍るが如く踵は地につかず、をめき

叫んで行列の横ざまを眞一文字に衝き掛けたり、

不意をうたれながらも流石は武門、

「狼藉ものツ」

叫びながら二百に餘る武士が懸命の働き、みるくうちに血煙り立  
て、三四人の奴ばたくと仆れたり、

「斬ツたぞく」

「サンピンおつを遣るぞ」

呼ばはりながら無二無三、懼るゝことを知らず死することを感せず、  
掛引もあらばこそ劔法も入らばこそ、刀背厚き新刀を打ち振って横  
なぐりに、エイ〜と聲かけ踏み込む勢ひに、しらけて見ゆる敵の  
中より割ッて出でたる一個の武士、大刀ひッさげ町駕を目掛けて駈  
け寄るや、遮る奴二人を物の見事に斬り伏せつ、かへす尖鋒を町駕  
の中にズバと突き入れたり、

廣徳寺門外に血煙り颯とたちて、命は斯様に捨て給へといはぬばかり、  
十六人の奴が算を亂せし屍に自慢の銘をうち、一人の逃げ傷怯  
れ傷はあらねど、笑止にも氣の毒や、武門の敵手こそ五十に近き死  
様の見苦しさ、其は兎まれ角まれ、事の基因は一挺の町駕、主や誰



れ様は如何にと思ひしに、空蟬の殻駕微塵に碎かれながら、夏の晝寝に蚊を殺せしほどの血痕もなし、

何事ぞ、點火ごろより山谷の阿爺が許へ馳せ集ふ町奴は引きも絶らず、或は三人或は五人、螻蛄の甘露を慕ふが如く、うち連れ組み合ひ誘ひ合うて、詰めたりや詰めたり、六分は家外に溢れて此處に一團かしこに一團、おくれで駆け付けし者は待乳山の上下、おの／＼徽號うつたる勇みの長提灯を圍みつ、額を集め腕を組み私語さ合ふ有様、それといはゞ其ま、砂烟り巻いて立たむ氣色に木の葉の露も蒸せて宿らず、

こゝ樓上には眩きまで燭臺を點し聯ねて、廊座に主人の阿爺を取圍んだるは、多くの中に重立ちし三十餘人の町奴、皆胴金巻きの脇差ひきつけて大胡坐、水櫛いれし撥鬢頭髮ふりたて、

「さア、斯様なツたからは一寸も退かぬ、きけば源次大哥といひ、また今日の十六人といひ、さ、さ、佐倉の二字が癢に觸つて堪らぬわ」

「よく言ツた、全體の基因は飛鳥山にしろ、こッ旗本にしろ、今では佐倉が當の仇敵だ、大名に遠慮して片時も江戸に住めるものか」

「さうだ、三日月の子分は皆男だと世の中に謠はれたい、死んで地獄で一花咲かすも妙だ」

「面白くなつて来た、腕が鳴つてキウ／＼音がするわ」

「さや、あれも脛ッぼしがムヅ／＼して来たぞ」

「あ、あ、あれもだ、これを無事に済ましたら後が困る、第一、寝ざめが悪くて膽ッ玉が夜鳴きする」



いひたさまの言葉に艶は持たねど、げに青竹を割りし東男の勇み、中に一人しをれながら疊を叩き、

「全體、此家の阿爺が恨みだ、あゝ、今更ら愚癡だが己は阿爺を恨む」

聞いて主人の阿爺は組んだる腕を俄に解き、

「も、も、尤もだ、一言ない、しかし能く聞け、親子兄弟に勝った男の間柄、何しに隠したからう、それを今更で治郎が事は知らぬ知らぬと包み隠したは、全く深い仔細があつたからだ、なれど、今日の十七人が目早く治郎の駕と知つて追ッ掛けたと聞いてから、えゝ失策ツた、所詮ダメだ、此上は皆を集めて一相談と思つた折に血腥い通報、おひゝ聞き付けて兎も角も此の阿爺が膝下へ寄ツて呉れたは、いやもう、嬉しう思ふわ、治郎が聞いて

ても嘸よろこぶだらう、山谷の國五郎が改めて禮をいふ、また治郎が名代として禮をいふ」

かの恨みをいひし奴は何思ひけむ、姿にも似ずポロゝと涙こぼして、また疊を叩きはじめ、

「阿爺、それだから己は尙更ら恨む、禮をいふとは何事だ、れ、れ、禮をいふとは他人行儀も程があるわ、水臭い、禮とは何だ禮、禮、えゝ腹が立ツて、か、か、悲しくなツて來た、おッ皆の兄弟、山谷の阿爺と親分に禮を言はして、す、す、濟むか、濟むなら濟むといへ、さア敵手は己だ」

他の者は俄にクツゝと笑ひ出し、互に袖ひきて聲潜めながら、

「彼奴には何日も愚癡で困る、あまり正直すぎて些と足らない處がある、慰めて機嫌取ツて遣れ、相談の邪魔になる」



いふを耳敏く聞き付けて、

「な、な、なんだ、足りないとは何が足りない、慥か邪魔になる  
と言ッたな、よし言ッた奴こゝへ出ろ」

阿爺は起ち上ッて頻りに手を振り、

「ま、ま、待ッた、白といふも黒といふも皆心は一つだ、さアこ  
れから、この阿爺が言ふこと、能く聞いて呉れ」

をりしも家外に待ち草臥れし許多の奴ども、足踏み鳴らして手を上  
げつ、聲々に、

「どうだ〜」

「相談、纏ッたか」

「何時でも用意は大丈夫だ」

阿爺は障子ひきあけ、樓欄に倚ッて見互せば人間の山、我家の軒下

より待乳の山へ掛け、山谷堀の向岸、隅田の堤の一廣場、勇み提灯  
は宇治の川瀬の螢火も斯くやあらじ、今更に驚きつゝ我知らず獨り  
言、

「あゝ治郎は見事な男だ」

阿爺は座に戻ッてドツカと坐し、三十餘人の町奴を珍らしげにジロ  
ジロ見まはし、

「いや來たわ〜、山谷の國五郎も、この老齡になッて此の全盛  
は始めてだ、しかし、斯う大勢が寄り集ッては町奉行が目付  
ける、兎も角も今夜は一同に退かせて呉れ」

「阿爺、町奉行が何だ、全體、今の奉行は鬼若三次の敵だせ」

「事の序だ、奉行から、やツつけろ」

悪あがきの子に強情らるゝ如く、阿爺は顔を皺めて、



「いや〜、まだ考が若い、もし奉行からケチを付けられて、思はぬ繚纏を出しては氣が利かぬ、五百に餘る三日月の子分が一生一代の掛引だ、小を捨て、大を擲むが眞の臂突き、前刻も言ふ通り、十六人が大名の行列破った罪で獄門に晒さるゝは知れたこと、それさへ文句を出さず手も出さぬ覺悟、萬事は、この阿爺に任してくれ」

汗水になつて説きつ諭しつ、一先づ今夜を無事に退かせしものゝ、いはゞ紙の袋に火を盛りし心地、流石の阿爺も胸に手を置いて思案に夜の更くるも知らず、

「伯父さん、伯父さん」

頻りに物いひ掛くるお菊が顔を何時になく睨みつけて聲鋭く、

「え、喧しい、治郎は無事だ、早く寝ろッ」

をりしも夜は次第に更けて幽に聞ゆるスリ半鐘の音、傳へ傳へて俄に近く鳴り互りぬ、阿爺は掌を耳朶にあて、膝を立て、

「尋常のスリと音が違ふ、やア拳が狂ひ出した、お菊、若い奴を呼べッ」

何者とも知れず門の戸を破るゝばかり打ち叩き、

「スリだ〜」

阿爺は内より聲高く、

「場所は、見當つけろ」

聲に應じて、

「下谷、佐倉の邸宅だ」

「南無三」



奥殿の鞆造りなる一室のうち、籠むるにあらねど焚きし名香の馨り床しく、茶染羽二重の裕衣かさねて蔭に膝を埋め、小堀が名残の遠州行燈を引き寄せ、竹壘の見臺に向うて書見せるは酒井若狭守、隣室に響く五つの時計に耳をたて、

「誰か来よ、誰か来よ」

聲に應じて小姓の者いで来りぬ、

「甲夜に待たせ置いた町奴を呼べ」

領承しつ、スベリ出でむとするに再び聲かけ、

「衣類などは其まゝで宜いぞ、作法を強ふるな、萬事彼れが勝手に致して遣れ」

當時には儲も不思議の事かや、一室のうちに天下の大老が町奴と膝を交へ、しかも人拂ひしつ密談に時をうつせり、たゞ洩れ聞えしは

若狭守が聲、

「合點まるツたか、世の爲めである、引き下ツて屠腹を、士分の扱ひ取らするぞ」

續いて聞ゆるは治郎が聲、

「前例なき御懇命、下郎の身には冥加至極、謹んで御受け致すべきなれど、治郎吉奴は俄に命が惜しくなり、死ぬ事は平に御免を」

「何と申す、聞き及んだとは全く相違の返答ぶり、むゝ」

あとはまた潜めきて聞えざりしが、やゝ程経て大老が高く呼ぶ聲に隔て居たる小姓いで、伺へば、

「この治郎吉は仔細あつて屋敷に留め置く、表の者共に申し付けて、不自由なきやう手當を遣はせ、よいか」



刃の襖にもあれ鐵壁にもあれ、大喝一聲叫んで蹴破るに何の苦は持たねど、色香床しう斜めに出づる梅が枝には、かたき頸骨を縮めて潜るの譬へ、浮世に厄介かくるも今しばしと覺悟しつ、また捕はれし大老の長屋は露の命の置きどころ、思へば過ぎし飛鳥山の血の雨、鬼若三次の笑ひ死、さては恩ある貴人が非業の死、續いて哀れを遺す源次の最後、けふの途中に十七人を見殺しにせしも重ね重ねの罪作り、あはれ、敵といふは彼れの味方、味方といふは彼れの敵、いづれにせよ、一人の我ゆる此うへ如何なる罪や作らむ、今宵大老への催促その方つかば、寸を延ばさず三日月治郎吉が日本晴れの最期ぞや、此後の敵味方、堪忍せよ、堪忍せよ、

ふけゆく夜風に傳ふ半鐘の音色、治郎は耳傾けて聞きつゝ、不審の思ひ、をりしも邸中の火見櫓より番人の足輕が呼ぶ聲は流石に職柄、

夜陰に馴れし遠音の咽喉に細く跡を引き、

「下谷の方角失火で御坐る、失火で御坐る、下谷の方角で御坐る、

風は北七分西三分、火先は色冴えて一本もやし、町家には御坐

らぬ、いづれかの屋敷火事に御坐る」

櫓下には傳へて拍子木の音をたて長屋々々を呼びまはるに、治郎は枕おしやりて萬一やと心に掛る一思案、さて、下谷の屋敷、それではなきか、こゝは大老の役宅、いづれ駆け注進あらむ、と思ふ間もなぐ窓下を馬に鞭うつ蹄の響き、門前に勢振ひの嘶きと共に玄關の方に聞ゆるは、

「町奉行所より失火の御届け、下谷徒士町、佐倉殿の中屋敷で御坐る」

夜具はね退けて岸破と起き上る治郎が忍喝、



「失策ツた」

素肌すはだのまゝの裕衣あはせに名古屋帯なごやあびひきしめ、九寸の藤四郎吉光ふじしやうきちみつを手拭てぬぐひに包括くわくんで前半まへはんに横よこたへ、長屋ながやを駈かけ出いで、侍部屋さむらひべやの内うち玄關げんくわんに聲こゑせはしく、

「今宵こんやお召めしによつて参上さんじやうのまゝ、お邸宅やしきにお留置とめ置きとなつた町奴ちやうぬに御坐ごまいます、至急しきよく々々、御當番ごたうばんお重役ぢゆうやくの方かたまで願ねがひます、お執達しつたつ、お執達しつたつ」

一團たんの天あまを焦こがして星ほしを燦やき落おささむず下谷徒士町しもやだにじちやう、方二町はうにちやうに餘あまりて建て聯つらねたる佐倉さくらの屋敷やしきは、炎ほのほもて包たまれぬ、轟とどろき互ある黒くろ煙けむりは幾段いくたんの波なみを打うつて西北せきぱくに靡なびくかと見れば、渦卷うずまきつゝまた立ち直たち直ただる綻はたらびより紅くれないの舌したを吐はき、をりく凄すさまじき物音ものねに地響ちひびきすると等ひとしく、燃もえながらの椽たるきとび梁らうはねて、どつと動ゆぎたつ火ひの

粉こなは中空ちゆうくうに舞まひ上あり、下したには老幼らうじゆうが遁にげ場ばうしなひ泣なき叫さけぶ聲こゑ、今いままでも見えし定紋ぢやうもんの印しるし纏まとは既すでに影かげうせて、煙けむりに咽ひび火ひに焼やかれつ、狼狽ろうたへ走はしる藩士はんしの哀あはれさ、表門裏門おもてもんうらもんは更さらなり四面しやうめんの長屋ながやを半なかば焼やき仆たして、はや三さんつ葉は四よつ葉はの殿造とのづくりさへ落おちむとするに、無残むざんにも奇きツ怪くわいなるかな、四十八組しじゅうはちごの人足ひとぞくこゝの屋根やねかしの庫藏くらざうに溢あふるゝばかり立たちながら、一人ひとりの踏ふみ込こんで消けし止とめむとする者ものなく、さりとして佐倉さくらの屋敷やしきより外ほかへは一片ひとつの火ひの粉こなも散ちらさず、江戸えどの名物めいぶつと櫓やぐら々にスリ出い出す半鐘はんしゆうの音ねは、腕うでに糾よりかけて翻ひるへす纏馬まとひば簾れんに勇いみ添そへつゝ、鯨波くじなみの聲こゑのみ打うち上げて只ただ四方しほうより見物けんぶつしたりける、

げにや徳川とくがはの花はなに數かずへしは大名火事たいめいやくわじに町奉行ちやうぶぎやうの騎のり出いし、素破すはといひざま釣つり鞍くらを嘶いなく馬うまの背せに投なげかけ、定紋ぢやうもんうツたる晴はれ装束しやうそくに火ひ



事頭巾の鍛ながして、與力同心を前後に隨へ馳せ付け見れば、こは如何に、炎焰を巻いて燃え上れども一人の火掛りする者なく、四面の屋根より鬮を作つて見物せる有様に、奉行は憤怒の聲もろとも采配うち振つて鞍壺に伸び上り、

「奇ッ怪の奴ども、後の咎めを恐れぬか、掛れ掛れッ、火掛りせよッ」

呼べど叫べど其の甲斐あらばこそ、此處かしこの屋根瓦を纏の石突に叩き碎いて躍り上り、

「火の粉の中で物いはすな、奉行でも大名でも手の中だ」  
前代未聞の振舞に髪逆立ちし奉行は一も二もなく、

「それ召捕れ」

大喝一聲の下、罵る聲を見當に四十餘人の與力同心、あはや驅け上

らむとする折しもあれ、水薦かけし七八挺の駕を取圍みつ、炎焰を踏んで走り出でたる佐倉の藩士百人あまり、半は駕を守護つて指す方に向はむとし、半は踏み止つて奉行に力を合はさむ勢ひ、見るより四方の屋根に纏馬簾を一時に振りたて、

「おッ、出た、本尊が出た、お見舞ひ申せッ」

たゞ見る瓦は飛んで雨とやいはむ霞とやいはむ、奉行も藩士も不意をうたれて狼狽へ騒ぎ、あはれや詮術つきて一先づ退かむとせるを見すまし、東の辻より顯はれ出でたる一群の人数、皆な板刺子の長半纏に二つ割りの頭巾、濡れ草鞋ふみしめて手鉤ひッさげたれど印の纏もなく働き道具もなさは必定くせもの、

「遁げるな盲目奉行、恥を知れ佐倉のサンピン、引ッ返せ、引ッ返せ」



呼ばはりながら足並作つて駆け寄り、奉行は俄に馬の頭を立て直して鎧ふん張り、抜き放ちたる白刃もて藩士と手の者を勵まし、

「斬り捨てッ、斬り込め、斬れ〜、斬れッ」

どろ〜と鳴り互る火の手は萬千の篝火、宙に翻して抛げ出す瓦は秋の夕日に飛び交ふ小鳥、彼方は抜き連れたる白刃の炎焔に映じて、はや血糊を灑ぐかと怪しむばかりに益々勢ひを添へ、此方は四方より振り立つる纏馬簾の音、かつは馴れし火事場の掛引に愈々勇を驅り、敵、味方、あはや近寄つて既に斯うよと見ゆる折しも、

「待ッた、雙方まッた、山谷の阿爺が首つン出す、さて、待ッた待ッた」

叫びつ、横合より斜めに割ッて中間を隔てたり、その道に育ちしが

今ぞ名残の場所、國の字を染め抜いたる播磨革の伊達羽織に、わざと頭巾は後に投げて七十の禿頭を火に照らし、磨きたてたるセメ入の手鉤携へ、左には勇みの長提灯を振り翳し、火の手の風下に鬢の白髪を吹かしたる様みんごと〜、

「そこ退け阿爺、この場を何と心得る、奉行の馬前に無禮もの、蹄に掛くるぞ、そこ退け」

「やア阿爺、危い〜、退いた〜」

國五郎は敵味方の眞ッ只中に立ち塞がッて雙手をあげ、

「御馬前は素より承知、四十八組の頭取役山谷の國で御坐る、この場へ出たに御不審ない筈、兎も角も、一先づ御引上げ願ひます、やい野郎ども退けッ、御引き上げ願ふ、皆の奴ひけッ」

こなたの軒端に寄り掛けたる竹梯子を目早く見付け、老いても力量、



其を大地にバタと横たへ、

「山谷の阿爺が桁かけた、火事場の作法は別で御坐る、この竹梯子を蹄にお掛けあつては御爲めになるまい、え、野郎ども寸を踏み出して見る、御引き上げ、退けッ」

四方の屋根には印纏を突き立て、咽喉を破る鬨の聲、下には奉行と町奴が懸命必死に争ふ喧嘩の花、中を割つて昔しの腕を叩く阿爺が俠骨、その晴れを添へむとや、今ぞ一ゆり巻いて落つる殿作りの響もろとも、雨と降る火の粉を凌いで俄に立つる竹梯子に、見れば猿の如く體を捻つてスラ／＼と登る一人あり、頂上の金輪に腰を持たせて雙脛を河津まき、丸に劍酸漿の紋うつたる弓張提灯を高く翳して、身を伸しつ四方を睨んだる大額の男、炎焰に照らされて満面朱を灑ぎ、宛ら赤鬼の中空に躍りかゝるかと思ふばかり、響き互る大

音あげて、

「大老酒井家より火事見の下郎、鎮まれ」

ふく風のもとをたゞせば秩父おろしと、こゝは童の謠ふ大塚村、土一升到金一升の江戸つゞき、三味の音じめの音羽町に隣れど、俄に品下る田舎のけしき、その村外れなる龍泉寺の門前に、さゝやかなる杉の生垣ゆひ繞して、古りたる松の小影に竹の網戸を半ば開き、道ゆく人と呼びとめて澁茶くみだす美人ありしが、あはれや五年前に脆くも消えて苔の下、今は餘波の色香たづねて美人茶屋の名こそ残れど、主人は六十路に上る老婆なりけり、  
晝過ぐるころなりけむ、一挺の駕を寺の門前に待たせ置き、誰が亡



魂の墓詣でにや、手向も濟みて歸りがけ、網戸を推して此の茶屋に入り來る男あり、おぼろ富士といへる大編笠を面深に引ツ被り、眞岡木綿の黒き袷を裾短かに、名古屋帯ぐるぐると巻き付けて横むすび、尺にも足らぬ布まき物を腰に差したるまゝ、床几にドカと臀うちかけて、

「茶をくれ」

呼べど答へなし、

もとより廣からぬ住居なれば、縁傳ひに木の間がくれの一間のうち、病人ありと覺しく俄に咳き込む痰のつかへ、かつは人の慌て、介抱する氣はひ手に取る如し、かの男は深編笠を傾けて聞き居たりしが、いつしか其れも靜まりしと思ふころ、又もや聲かけて、

「茶をくれ、茶を汲め」

始めて客ありと心づきけむ、十歳ばかりなる女の童かけ出でたるが、今までも事に追はれしと見え、かひなくしく小褙端折り袖まくり上げたるさま、育てながら小まざくれて愛々しく、雪の腕は肱にも露を滾し、浮世を知らぬ花の面を惜し氣もなく釜の前につき、やがて塗盆の茶菓ひき添へて持ち來り、

「御客さま、めしませ」

男は笠の中より沁みくと其の顔を打守るありさま、

「あゝ争はれぬわ、歳はいくつになる、なに十一、む、よい娘ツ子だ」

いひつゝ、そと手を取れば、まだ整はぬ眉ひそめて驚き逃げむと藻搔くに、

「いや怖うことはなら、よい物を遣る」



右の手を懐に差し入れて掴み出せし紙包みの重げなるを、女の童が掌に確乎と握らせて、

「こりや、早く大きうなれ」

をりしも主人の老婆いで來りしを見て、女の童は持たれし手を振り解さつ、走りよつて紙包みを示し何事かを私語くに、老婆は受取りて驚きしが、またカラ〜と笑ひ、其を掌に載せて男の前に小腰を屈め、

「これは〜、お戯れに掛つて可憐ら膽潰しました」

一文二文の茶料にも客を扱ふ渡世がら、老いの笑ひに世辭もたせて推し戻さむとするに、男は身動きもせず冠れる笠のみ横に振りて、

「戯れでない、慥に呉れた」

老婆は惘れて男の姿じろ〜見まはし、

「何の譯で此の大金を、お茶代にしては途方もなう」

「いや茶の料でない、あの娘ツ子に呉れた」

老婆は後に立てる女の童を振り返りて、また此方に向ひ、

「どなた様か、婆が安心のため、お名前と、その譯を」

男は腰かけたるまゝ、稍屈みて聲低く、

「源次が身の者だ、小車の」

さくより老婆は俄に女の童を引き寄せ、その身も共に摺り寄りて言葉せはしう、

「いよ〜此まゝお返し申されぬ、是非ともお名前を、いづれさまで」

「物忘れの早い婆さん、五六年前までは龍泉寺へ墓詣りのをりをり休憩んだことある、姿風俗こそ變れ、物ごし言葉つきで其



れと知れる筈」

いひつゝ、兩の掌を向うさまに出して、

「花川戸の、これだ〜」

思はず立てし老婆が高聲、

「あれ、三日月の親」

「叱ッ」

奥の一室より病み惚けて續かぬ聲ながら、流石に残る金平の俠なる言葉はりあげ、

「み、み、三日月に逢はう、不動、不動山、秀五郎だッ、身動き、な、

ならぬ、こゝまで脛ッぼし、ふん出してくれ」

さくと等して大編笠にピクリと小動き打ッて、かけたるまゝの腰を其方に捻り、

「はッてな、こいつは妙だ、花見の歸りに瓢箪拾ッた心地がする、

婆さん、今の聲はぬしが親類か、たゞし他人か」

「いえ、あれは近ごろ來た甥」

いひさして慌しう走り込むに、女の童も續いてかけ入りぬ、

笠かぶりしまゝ、その一室に行きみれば、あはれ金剛力士の面影あり

し秀五郎も、今は夜具跳ね退くる力さへなく、僅に片腕を立て、身

を持たせつゝ、病苦を忍んで組みし胡坐の肉も落ちて骨高し、治郎

は立ちながら笠の端に手を掛けて見下し、

「不思議な場所で思はぬ出會ひ、互の物いひは先づ後刻、とにか

く其さま氣の毒だ、笠とツて面みせる筈なれど、今日は事故あ

ツて舅の墓詣りに我身ながら借りて來た三日月治郎、かぶりも

のは此まゝ許せ、汝も横にぶッ仆れて寝ながら語れ」



秀五郎は窪みし眼を見上げて大息つき、

「此ざまでは、定めて、料理甲斐、なからう、が、まゝ其處に蹲  
ツて聞け、聞いてくれッ」

何となく濁る互の言葉に角たちて、様子を氣遣ひつゝウロ／＼せる  
老婆と女の童を振り返り、

「伯母御ッ、す、す、少しの間、表へ、表へ」

治郎も手をあげて聲静に、

「婆さん、花川戸だ、心配いらぬわ」

治郎は後ざまに手を伸べて障子ビタリと閉めつ、枕下に大胡坐の膝  
動かし、

「秀ッ」

膽に應ふる大俠の一聲を、病みながらも返す不敵の音聲、

「三日月ッ」

睨み上げつゝ少し這ひ出して、苦しげなる息を氣に呑み込み、

「事の行き掛りで、男が頼まれた一本通し、骨と肉とが離るゝも  
と思つた、なれど、あまり、無法卑怯な田原大角、見限つて今  
では汝に味方する、いゝや、さて、聞け、味方とは、この秀が  
懺悔の事だ」

「よし、分つた、苦しい咽喉を過すな、おれから言つて聞かせる、  
こゝら邊りも噂があらう、四日以前、真夜中ごろに佐倉の中屋  
敷に火の粉が降つたと聞くや南無三、もし子分の奴等がとの心  
掛り、御大老の火事見下郎となつて駈け付けたは、この面を看  
板にかけて互に無益の罪作りさせぬため、また十七人の武士、  
いや、それも承知、白須の親殿を暗殺にかけた證據は疾にあがッ